

火薬船

海野十三

青空文庫

怪貨物船あらわる！

北緯二十度、東経百十五度。

——というと、そこはちようど香港^{ホンゴン}を真南に三百五十キロばかりくだった海面であるが、警備中のわが駆逐艦^{くちくかん}松風は、一せきのあやしい中国船が前方を南西へむかつて横ぎっていくのを発見した。

「——貨物船。推定トン数五百トン、船尾に“平靖号^{へいせいごう}”の三字をみとむ……」

と、見張兵は、望遠鏡片手に、大声でどなる。

艦橋には、艦長の姿があらわれた。そしてこれも双眼鏡をぴたりと両眼につけ、蒼茫そうぼうとくれゆく海面に黒煙をうしろにながくひきながら、全速力で遠ざかりゆくその怪貨物船にじっと注目した。

「商船旗もだしておりませんし、さつきから観察していますと、多分にあやしむべき点があります」

副長が、傍から説明をはさんだ。

艦長は、それを聞いて、双眼鏡をにぎりしめ、ぐつと顎あごをむこうへつきだした。

「追え！」

命令は下つたのだ。

駆逐艦松風は、まもなく全速力で、怪船のあとをおいかけた。艦首から左右に、雪のような真白な波がたつて、さーつと高く後へとぶ。

一体あの怪中国船は、どこの港から出てきたのであろうか。どんな荷をつんで、どこへいくつもりなのであろうか。いま怪船のとつている針路からかんがえると、南シナ海をさらに南西へ下つていくところからみて、目的地はマレー半島でもあるのか。

小さな貨物船は、速力のでんで到底わが駆逐艦の敵ではなかつた。ものの十分とたたない間に駆逐艦松風は、怪船においつき、舷と舷とがすれあわんばかりに近づいた。

駆逐艦のヤードに、さつと信号旗がひるがえった。

“停船せよ！”

怪貨物船は、この信号を知らぬかおで、そのまま航走をつづけた。甲板かんばん上には、たった一人の船員のすがたも見えない。さつきまでは、そうではなかった。双眼鏡のそこに、たしかに甲板にうごく船員のすがたをみとめたのに。

停船命令を出したのに、怪船がそれを無視してそのまま航走をつづけるとあつては、わが駆逐艦もだまつているわけにはいかない。副砲は、一せいに怪船の方にむけられた。撃ち方はじめの号令が下れば、貨物船はたちまち蜂のすのようになつて、撃沈せられるであろう。雨か風か、わが乗組員は唇をきつとむすんで、怪

船から眼をはなさない。

それがきいたのか、怪船はにわかにも速力をおとした。それとともに、甲板のものかげから、ねずみのように船員たちがかおを出しては、また引っこめる。

岸^{きし}少尉を指揮官とする臨^{りん}検^{けん}隊^{たい}が、ボートにうちのおつて、怪貨物船に近づいていった。むこうの方でも、もう観念したものと見え、舷^{げん}側^{そく}から一本の繫^{けい}梯子^{はしご}がつり下げられた。わがボートはたくみにその下によつた。

岸少尉を先頭に、臨検隊員は、怪船の甲板上におどりあがった。「帝国海軍は、作戦上の必要により、ここに本船を臨検する」

中国語に堪能な岸隊長は、船員たちのかおをぐつとにらみつけ

ながら、りゆうちよう流暢な言葉で、臨検の挨拶をのべた。

そのとき、甲板にぞろぞろ出て来た船員たちの中から、半裸の中国人が一人、前にでて、

「臨検はどうぞ御勝手に。その前に、船長がちよつと隊長さんにお目にかかりたいと申して、このむこうの公室こうしつでまっています」

「なに、向うの室へ、船長がこいというのか。なかなか無礼なことをいうね。用があれば、そつちがここへ出でて来いといえ」

「はい、それがちよつと出られない事情がありました、ぜひにまげて御足労をおねがいしろとのことですよ」

「出て来られない事情というのは何か。それをいえ」

岸隊長は、まるで母国語ぼこくごのように、中国語でべらべらいまく

る。

そのとき、かの半裸の中国人は、一步前に出た。ひそかに岸隊長にはなしをするつもりだったらしいが、隊長の部下がどうしてこれを見おとそうか、剣つき銃をもつて、隊長の前に白刃のふすまをきずいた。

「とまれ！」

もう一步隊長の方へよつてみる、そのときは芋ざしだぞといいはげしいいきおいだ。

「あッ、危ねえ！」

かの半裸の中国人は、飛鳥ひちようのように後へとびさがつたが、そのとき臨検隊の一同は、おやという表情で、その中国人のかおを

みつめた。それも道理だ。その中国人が、〃あッ、危ねえ！〃と、きゆうにあざやかな日本語をしゃべったからである。

「やつ、貴様は何者！」

岸少尉は、相手をにらみすえた。

太ふてふて々しい若者

「いや、どうも。びつくりしたとたん、化ぼけの皮かわがはがれるとは、われながら大失敗でありました。ははははは」

と、半裸の若者は、頭をかいてわらう。びっくりした気色けしきはさ
らに見えない。見なおすと、この男、わかいながらなかなか太々
しいところが見える。

だが、こつちは岸隊長以下、すこしも油断はしていなかった。
中国人が、急にまきじた巻舌の東京弁でしゃべりだしたのには、ちよつ
とおどろいたが、わけのわからないうちに安心はしない。

「わらうのは後にしろ。貴様は何者か」
岸隊長も、こんどは日本語でどなりつけた。

「やあ、どうもわが海軍軍人の前でわらつてすみませんでした」
と、かの若者は頭を下げ「私は四国の生れでたけみたらうはち竹見太郎八とい
う者です。この貨物船平靖号の水夫すいふをしています」

「ふん、竹見太郎八か、お前、なぜこんな中国船の水夫となつてはたらいしているのか」

「はい。私はなにも申上げられません。しかし、さつきも申しましたとおり、船長があなたにお目にかかりたいといつていますから、まげて船長の公室こうしつへおいでくださいませんか。これにはいろいろ事情がありまして……」

水夫竹見は、にわか俄にていねいになつて、岸隊長をうごかそうとする。その熱心が、彼の顔にはつきりあらわれているので、隊長もその気になつて、彼に案内をめいじた。

このような小さな貨物船に、船長の公室があるというのも笑止千万であるが、ともかくも岸隊長は、隊員の一部をひきつれて、

竹見のあとにつづいて公室の入口をくぐった。そこは船橋のすぐ下で、船長室につづいた室だった。

入ってみて、またおどろいた。

室内は、こんな貧弱な船に似合わず、けんらん絢爛眼をうばう大した装飾がしてあって、まるで中国のお寺にいったような気がする。入口をはいつたところには、高級船員らしい七八人の男がきちんと整列していて、隊長岸少尉のかおを見ると、一せいに拳手の礼を行った。

室の真中に、一つの大きな卓テーブル子がある。その前に、一人の肥満した人物が、ふかい椅子に腰をかけている。

「さあ、どうぞこちらへ」

と、その肥満漢ひまんかんは手をのばして、隊長に上席じょうせきをすすめた。

混じり気のない立派な日本語であった。どうやらこれが船長らしい。だが船長にしろ、椅子にこしをかけたまま、帝国軍人に呼びかけるとは無礼至極であるとおもっていると、かの肥満漢は、

「私は脚が不自由なものでしてナ、お迎えにも出られませんで、
御無礼ごぶれいをしておりますじや。この汽船の船長天虎てんこう来こと淡島あわしま
造とらぞうでござんす」

と、ていねいに挨拶をしてあたまを下げた。

脚が不自由だという。見れば、なるほどこの虎船長の両脚は、太腿のところからぷつりと両断されて無い。

このように脚が不自由だから、岸隊長を公室までまねいたこと

が一応合がってん点てんがいった。しかしいくら脚が不自由でも、この船長だつて出てこられないはずはないのだがと、岸隊長はどこまでもこまかいところへ気を配りつつ訊問じんもんにかかった。

「本船のせきは、日本か中国か」

「もちろん日本でございます」

「日本船なら、なぜ船尾に日章旗を立てないのか」

「おそれ入りますが、これにはいろいろ仔細しさいがございます……」
と、かの虎船長は一揖いちゆうして、きつと形をあらため、かたりだしたところによると、

「——この平靖号は、中国から分捕った貨物船でありまして、は私わらひきげ
下くだ 手続をとつて手に入れたものであります。この汽船には四

十八名の乗組員がおりますが、どれもこれも中国語をよくあやつる。しかしそのうち八名を除いて、のこり四十名はいずれも生きつす粋いの日本人でございます。そこに立っております高級船員たちも、どこから見ても中国人ですが、これがみな日本人なんで、商船学校も出た者もおりますし、予備の海兵も混っております」

虎船長は、そういつて後の船員たちを指した。岸隊長は、あらためて高級船員の面をじつと見まわしたが、なるほど、眼の光だけは炯けいけい々として、新東亜建設の大精神にもえていることがはっきりと看取される。

「本船の目的は、どこか。また、なぜこんなに、すっかり中国式になつていいのか。日本人らしい装飾も什器も、なんにもないで

はないか」

岸隊長は、疑問のてんをついた。

「はい、本船の目的と申しまするのは、日本を飛びだして日本に帰らないということでもあります。われわれ一同、こせこせした日本人に嫌気いやけがさし、日本人を廃業して中国人になり切り、南シナ海からマレー、インドの方までもこの船一つを資本として、きのうは東に、きようは西にと、気ままに航海をつづけようというのであります。積荷は、ことごとく中国雑貨と酒です」

日本人を廃業するんだとは、船長なかなかすごいことをいいだしたものである。そういつておいて、船長はじつと岸少尉の顔色をうかがっていた。

地方版の記憶から

「日本人を廃業して、ふたたび日本にかえらないというのか。ふん、なるほど」

岸少尉は、わかいがさすがに思慮ある士官、べつだんいやなかおもせず、船長のおもてを見かえして、

「あれは今から一ヶ月ほど前のことだったか、長崎県の或るさびれた禪寺ぜんでらにおいて、土地の人がびつくりしたくらいの盛大な法ほ

会が行われたそうだね」

と妙なことを岸少尉はしやべりだした。

「はあ、そうでしたか」

「そうでしたかというところを見ると、貴公は知らないに見えるね。——その法会に参加した人数は五十人あまり、法会の模様からさつすると、これは団体的葬儀の略式なるものであったということが分つた。その中に一人、容貌魁偉ようぼうかいいにして、ももより下、両脚が切断されて無いという人物が混っていたそうだが、そういうはなしを貴公は聞いたことがないか。なんのためのひめたる団体葬儀であろうか。仏の数が五十人あまり、参会者もまた同数の五十人あまりだという。一体だれの葬儀なのであろうか」

岸少尉のかたるうちに、途中で一度、虎船長は、はつと思つた様子だが、少尉がかたりおわるや、からからとうち笑つて、

「はつはつはつはつ。世間には、どうもまぎれやすいはなしがあるものですな。両脚のない人間も世間には何百人といふんですぞ。団体葬儀だなんて、それは誰かの早合点はやがってんでありましょう」

と、少尉のいうことを盛んにうちけす。

「はつはつはつ」と、こんどは岸少尉がうちわらつて

「こうやって見まわすと、この船の乗組員たちは、どういふものかそろいもそろつて、頭の天頂てっぺんの附近に二銭銅貨大の禿はげ——禿ではない、毛が生えそろわなくてみじかいのだ、それが揃いも揃つて目につく。第一貴公のあたまにも、妙なところに山火事のあ

とみたいなものがあるではないか。さつきいった長崎の禪寺へ、五十人ほどの参会者がそろいもそろって毛髪をそって、納めていったそうだが、ずいぶん世間には、こまかいところまでつじつまのあう不思議なはなしがあるものだねえ」

これを聞くと、虎船長は、目を白黒。おもわず両手で椅子からとび下りようとしたが、結局それをあきらめて、

「ふふん、ふふふ。ふふふふ」

と、妙なわらい方をした。隊員一同も、わらいもできず、くすぐったいかおをして唇をかんでいる。臨検隊員は、少尉の言葉のいみをやっと諒解して、ものめずらしげに一同のかおを端から端へいくどもじろじろとながめやる。向うの一団は、いよいよ顔の

やり場にこまっている様子だ。

そのとき岸少尉は、キツと形を改め、そうちよう 莊 重なこえで、

「臨検は、これで終了した。なお、おわりに四十何人かの生ける亡者どのの健康をしゆくし、そしてその成功をいのつてやまぬ。

おわり」

そういつて少尉は、隊員をひきつれ、さつさと公室を出ていった。

少尉たちの靴音が甲板へきえても、虎船長はじめ公室の一同は、その場を石のようにうごかなかつた。どこからか、おえつ 嗚咽のこえがもれた。するとあつちでもこつちでも、すすりなきのこえが起つた。拳でなみだをはらっている者もある。感激のなみだだ！

生ける屍しかばねとなつて、ひめられた或る使命のために壮途につこう
という虎船長以下は、はからずも臨検の海軍軍人からげきれいの
言葉をうけ、感激のなみだは、あとからあとへと湧きいでて尽き
なかつたものだ。

「おい、おおくりしよう。わしを抱いてつれていけ」

虎船長がさげんだ。

船員たちは、へんじをするよりもはやく、脚のない船長を両脇
からいだきあげ、甲板へつれていった。そのとき臨検隊長岸少尉
は、舷側におろされた縄梯子なわぼしを今手をかけて下りようとしたと
ころだったが、虎船長があらわれたと知って、つかつかと後へ戻
り、無言のまましかとその手をにぎった。そのときである。副

隊長の兵曹が、

「あつ、岸隊長。本艦から至急帰還せよとの信号です。別な船が一せき、南方にあらわれました」と、こえをかけた。

このとき平靖号が、はからずも一つの大失敗をやったことが、後に至つて思いだされることとなつたが、まだだれも気がつかない。

ノールウエーの汽船

「あつはつはつ。さすがの海軍さんも、この平靖号にあきれてかえつたようだな」

例の大々ふてぶてしい水夫の竹見太郎八は、甲板かんばんのうえにはらをゆすぶつてからからとわらう。

「ちえつ、自分のことをたなにあげて、なにをわらうんだよ」

すぐ横槍が入った。それは、デリツクの下したにあぐらをかいて、さつきからのさわぎをもうわすれてしまった顔附で、せつせと釣道具の手入れによねんのない丸本慈三まるもとじぞうという水夫が、口を出したのである。

「な、なにをツ」

「なにをじやないぜ。さつきお前は、もうすこしで水兵の銃剣に

いもぎしになるところじゃった。あぶないあぶない」

この丸本という水夫は、竹見の相棒だった。年齢のところは、竹見よりもそんなに上でもないのに、まるで親爺おやしのような口をきくくせがあつた。この二人の口のやりとりこそ、はなはだらんぼうだが、じつはすこぶるの仲なかよしだった。

「なんだ、丸本。貴様は俺がいもぎしになるところをだまってみていたのか。友達ともだち甲斐がのないやつだ」

「ははは、なにをいう。お前みたいなむこう見ずのやつは、一ペんぐらい銃剣でいもぎしになっておくのが将来のくすりじやろう。おいしいところで、あの水兵……」

「こら、冗談も休み休みいえ。あの銃剣でいもぎしになれば、も

う二度とこうして二本足で甲板に立っていられやせんじやないか」
「そうでもないぞ。あの、われらの虎船長を見ろやい。足は二本ともきれいさっぱりとないが海軍さんを見送るため、ああしてちやんと甲板に立った。お前だって、いもざしになってもあれくらいのもねはできるじやろう」

「おお虎船長！」

と、竹見太郎八は、なにかをおもいだしたらしく、

「そうだ、俺は虎船長に用があつたんだ。おい、ちよつと歩いてくるぞ」

水夫竹見は、軽く甲板を蹴って、船橋へのぼる階段の方へ歩いていった。

船橋では、虎船長をはじめ、一等運転士や事務長以下の首脳者が、しきりに、はるか海面を指して、そこに視線をあつめていく。

「おお、あの船が、やっと旗を出した」

「なるほど、あれはノールウエーの旗ですな、ノールウエーの船とは、ちかごろめずらしい」

いま船橋で話題にのぼっているのは、さつきまでこの平靖号を臨検していたわが駆逐艦が、その臨検中に見つけた新しい一隻の怪船のことだった。わが駆逐艦は、その間近かにせまっている。そのとき怪船は、とつぜんノールウエーの国旗を船尾にさつと立てたのである。

「どうもあのノールウェー船はあやしいよ。むこうも貨物船だが、あのスピードのあることと叫びたら、さつきは豆粒ほどだったのが、今はこうして五千メートルぐらいに近づいている」

「ノーマ号と、船名がついてはいますぜ、一体なにをつんで、どこへいく船なのかなあ」

「きつと軍需品をつんでいるよ、あのかっこうではね。たしかにあやしいことは素人しろうとにもそれとわかるのに、ノールウェーでは、海軍さんも手の下くだし様ようがないんだろう」

「残念、残念。宣戦布告がしてないと、ずいぶんそんだなあ」

幹部たちは、ノーマ号と名のるノールウェー船のうえに、すくなからぬ疑惑をもって、ざんねんがったのである。

はたして、一同が見ているうちに、わが駆逐艦松風は、ノーマ号からはなれ、舳へさきをてんじて北の方へ快速力で航行していった。ノーマ号も、その後を追って北上するかとおもわれたが、どうしたものか、急に針路をかえ南西に転じた。

「あれっ、こつちと同じ方向へいくぞ！」
事務長が、目をぱちくりとやった。

「おい、へんだぞ。ノーマ号は、一向前のようなスピードを出さないじゃないか」

足のない虎船長がさげんだ。

「これじゃ、間もなく本船は、ノーマ号においてしまいますよ。なにかむこうは、かんがえていることがあるんですな」

頭のいい一等運転士の坂谷^{たかたに}が、早くも前途を見ぬいて、船員の注意をうながした。

坂谷のいったとおりだった。わが平靖号は、どんどんノーマ号の後に接近していった。

水夫の竹見は、さつきから船橋の入口に立っていたが、この場の緊張した空気におされて、無言のままだった。

「おや、竹見。なにか用か」

と、かえって虎船長からとわれて、彼は、はっといきをのんで二三歩前に出た。

「ああ船長。私は、折角ですが、この船から下りたいのであります」

「なにイ……」

虎船長は、あつけにとられて、竹見の顔をあらためて見なおした。

信号旗

「なに、もう一度いつてみる」

船長は虎とらの名にふさわしく、眼を炯けい々けいとひからせて、水夫竹見をにらみつけた。

「はい。私は本船を下りたくありません」

「な、なにをいうか、本船にのりこむ前に、あれほど誓約したではないか。本船にのつたうえからは、本船と身命をともして、目的に邁進すると。ははお前は、南シナ海の蒼い海あおの色をみて、きゆうに臆病風おくびようかぜに見まわれたんだな」

竹見は、目玉をくるくるうごかしつつ、

「臆病風なんて、そんなことは絶対にありません。私は……」
といっているとき、横から一等運転士の坂谷が

「船長。ノーマ号が、本船に“用談アリ、停船ヲ乞ウ”と信号旗をあげました。いかがいたしましたでしょうか」

「なに、用談アリ、停船ヲ乞ウといってきたか。どれ、向うはど

ういう様子か」

船長は、ノーマ号の様子をみるため、一旦双眼鏡を目にあてようとしたが、気がついて水夫竹見太郎八の方を向き、

「お前のはなしは、後でよく聞こう。それまでは下にいつてはた
らいている。じつに厄やっかい介なやつだ」

と、はきだすようにいった。

ノーマ号は、もうすこしで平靖号と並行しそうな位置まで近づいていた。そしてヤードにはたしかに用談アリ、停船ヲ乞ウの信号が出ていた。甲板を見わたすと、赤い髪に青い眼玉の船員や水夫が、にやにやうすわらいしながら、こつちを見おろしていた。

虎船長は、うむとうなつて、

「用談とは何の事だ。聞きかえしてやれ」といった。

信号旗は、こっちのヤードにも、するするとあがった。すると、すぐノーマ号から返事があつた。

“飲料水、野菜、果実ノ分譲ヲ乞ウ。高価ヲ以テ購^{あがな}ウ”

それを見て虎船長は、

「駄目だ。本船にも、その貯蔵がすくないから、頒^わけてやれない。香港^{ホンコン}か新嘉坡^{シンガポール}へ行って仕入れたらよかろうと行ってやれ」

と、命令した。

その信号は、再び平靖号のヤードに、一連^{いちれん}の旗となつてひら

ひらとひるがえつた。

すると、また折かえして、ノーマ号からの返事があつた。

「ゼヒ分譲タノム。量ノ如何ヲ問ワズ、本船ニかいけつびよう壊血病多数発生シ、ソノ治療用ニアテルタメナリ”

ノーマ号は、壊血病患者がたくさん発生しているから、ぜひ野菜や果実をわけてくれという信号なのである。

「壊血病とは、気の毒じゃ」と、虎船長はいつて、くびをふつた。「じゃあ、すこしわけてやることにするか」

と、いつて、事務長の方をふりかえつた。

「でも、本船の貯蔵量は、ほんとにぎりぎり間に合うだけしかないのですから、どうですかな」

事務長は、分譲に反対の口ぶりだつた。

「うむ、まあ海のうえでは、船のりと船のりとは相身互あいみだがいだ。すこしでいいから、なんとか融通してやったらどうじゃ」

虎船長は、若い日の船乗り生活の追憶からして、相身互いの説もちだした。

事務長は、だまっていると、傍にいた一等運転士の坂谷が、船長と事務長の間に入って入り、

「じゃあ、こうしてはどうですかなあ。こっちからノーマ号へ出かけていって、むこうのいうがごとくはたして壊血病患者がどんなに多数いるかどうかをたしかめたうえで、野菜や果実をわたしてやったがいではありませんか」

坂谷は、なかなかうまいことをいった。

「ああ、それならよかろう。事務長も、賛成じやろう」

と虎船長は、事務長の同意を確かめたうえで、飲料水一斗、野菜二貫匁、林檎三十個を、ボートで持たせてやることにして、その指揮を事務長にやらせることにした。

「よろしい、行つてきます」

事務長は、氣がるに立ち上つた。

そのときであつた。

「船長。私も、事務長と一緒に、ノーマ号へやつてください」

船橋の入口に立っていた水夫竹見が、いきなり船長の前へとびだしてきた。

「ううっ、竹見か、お前は、行くことならんぞ。下船げせんしたいなど

といい出すふらちなやつだ……」

「ちがいます。私が下船したいといったのは……」

「だまれ、竹見」と船長は、あかくなつてどなりつけた。

「わしは船長として貴様にめいずる。只今からのち貴様は本船内で一語も喋しゃべつてはならん。しかと命令したぞ。下へいつて、きんし謹しん慎しんしておれ」

船長は竹見に対して、たいへん不機嫌をつのらせるばかりだつた。

一体竹見は、なぜ下船したいなどと、とんでもないことをいいだしたものであろうか？

意外な人物

ノーマ号では、飲料水などを、平靖号が頒^わけてやってもいいという返事に、いろめきわたった。だが、ノーマ号からボートを下そうといったのに対し、平靖号は、こっちが品物をボートに積んでそっちへいくと行って聞かないので、ちよつと当惑をしたらしく、しばらくは、その返事をよこさなかつた。

やがてのことに、やつと応^{おう}諾^{だく}の返事が、ノーマ号からあがつたので、いよいよ事務長はボートを仕立てて、六人の部下とともに

に海上に下りた。

事務長は、みずから舵かじをひいた。

飲料水と野菜と果実とは、舳にあつめられ、そのうえに大きなカンバスのぬのをかぶせてあつた。

虎船長は、本船をはなれていくボートをじつとみていたが、側をかえりみて、

「おい、一等運転士。あの荷は、ばかに大きいじゃないか。事務長は、もつていく分量を、まちがえたんじゃないな」

「そうですね」と坂谷はくびをかしげて「まさか、事務長が、分量をまちがえることはありませんよ。事務長は、林檎一つさえ、ノーマ号へやりたがらなかつたんですからねえ」

「そういえば、そうだが、他人に呉れてやる物は、いやに大きくみえるのが人情なんだろうか」

船長は、ふしぎそうに、くびを左右へふった。

そのうちに平靖号のボートは、停船しているノーマ号の舷側についた。繩梯子なわばしこは、すでに水ぎわまで下されていた。

例のキャンバスが、一度とりのぞかれたが、すぐ元のように、品物のうえに被せられた。ノーマ号の船員に、ちよつと見せただけのようであつた。

ボートからは、事務長を先頭に、三人の者が、繩梯子をすするとのぼつて、ノーマ号の甲板に上つた。

ノーマ号の、高級船員らしいのが五六人、そこへ集つてきて、

なにか協議をはじめた様子である。きつと、壊血病患者がたくさん出たという先方のはなしをたしかめたうえでないと、品物を売りわたすことはできないといっているらしい。

「おやツ、あれはおかしいなあ」

とつぜん、船長が叫んだ。

「な、なんです。おかしいというのは……」

一等運転士が船長の顔をみた。

「あれみろ」と船長は、ボートの方をゆびさして「ノーマ号の上
にのぼった奴は三名、ボートには、五名のこっているじゃないか。
合計して八名。どうもへんだ」

「ははア」

「ははアじゃないよ。君もぼんやりしとるじゃないか。いまボー
トにのつて出懸けたのは、事務長と六名の漕手だから、みんなで
七名だ。ところが今見ると、いつの間にやら八名になっている」
「ははア、するといつの間にかどつかで一名ふえたようですな。
これはどうもふしぎだ」

と、一等運転士は、口では愕おどろいているが、態度では、そんなに
愕おどろいていない。彼はすでに、なにごとかをよきしていたようだ。

「ああッ、彼奴だ」と船長が大きなこえを出した。「竹見の奴、
いつの間にか、本船をぬけだして、ノーマ号の甲板かんばんに立ってい
やがる。あいつ、どうも仕様がないやつだなあ」

「えっ、やっぱり竹見でしたか」

「うぬ、船長の命令を聞かないで、わが隊のとうせいをみだすやつは、もうゆるしておけない。かえつてきたら、おしいやつだが、ぶつたぎつてしまふ」

虎船長はついに激怒してしまった。

その当人、竹見太郎八は、悠々とノーマ号の甲板をぶらぶらと歩いている。事務長が、ノーマ号の高級船員を相手に、強硬に主張をつつぱっているには、一向おかまいなしで、むこうの水夫をつかまえて、手真似ではなしをしている。

「どうだい。これは胡きゆうり瓜の缶詰だ。ほら、ここに胡瓜のえが描いてあるだろう。欲しけりや、お前たちに呉れてやらねえこともないぜ、あはははは」

集つてきたノーマ号の水夫たちは、竹見の顔色をうかがいながら、ごくりと咽喉のどをならした。

「われわれは、その缶詰が欲しい。そのかわり、汝なんじはなにをほつするか」

と、むこうも手真似だ。

「そうだねえ——」

と、竹見はいつて、ポケットから煙草たばこを一本だして口にくわえ、ぱつと燐寸マッチをつけた。

すると、ノーマ号の船員たちは、一せいに呀あつときけんで、真青になった。

なぜ彼等は、青くなつたのであろうか。

たばこ
煙草をなぜ嫌う？

ノーマ号の船員の一人が、水夫竹見のそばへとびこんできたと思うと、いきなり手をのばして、竹見の口から、火のついた煙草をもぎとつた。

「あれッ、らんぼうするな。おれに、煙草をすわせないつもりか」
竹見は、ことばもはげしく、中国語でどなりつけた。そしてすばやくみがまえた。だが、彼の眼光は、どうしたわけか、てつの

ように冷たくすんで、相手の顔色をじつとうかがっていた。

「いのち知らずの、黄いろい猿め！ とんでもない野郎だ！」

そういつたのは、ノーマ号の船員だ。

彼は、竹見からもぎとつた火のついた煙草を、大口あいて、ぱくりと口こうちゆう中へ！ まるで、はなしにある煙草ずきの蛙のように。

「おや、この煙草どろぼうめ。おれには、煙草をすわせないで、ひつたくつて食べつちまうとは、呆あきれたやつだ」

水夫竹見が、一本うちこむ。

が、このときはやく、かるときおそく、かの碧眼へきがんの船員は、ぷつと煙草をはきだし、

「あ、あついい！」

と叫ぶ。そして甲板^{かんぼん}へぺたりと落ちた煙草を、足下に踏みに
じつた。もちろんこのとき、煙草の火はきえていたけれど、

「あははは、ざま見ろ。火のついた煙草を喰つて、やけどをした
んだらう。ふふふふ、いい気味だ」

竹見は、へらず口をたたいて大いに、わらつた。

だが相手の船員たちは、真剣なかおで同僚の足元に視線をあつ
める。そして煙草に、火のついていないのをたしかめると、ほつ
とした面持^{おももち}になつた。言葉を発する者さえない。

竹見は、いじわるくにやりとわらつて、ポケットに手を入れた。
そしてまた新たに一本の煙草をとりだして、唇の間へ、ひよいと

くわえた。

おどろいたのは、ノーマ号の船員たちだ。わつとわめいて、一せいに水夫の竹見におどりかかった。竹見は、

「な、なにをするツ！」

と、どなったが、もちろん多勢たせいに無勢ぶせいで、とてもかなわないと見えたし、そのうえ、じつはこのとき竹見にもいささか考えがあつて、わざと相手のやりほうだいにまかせておいたのだつた。

すると相手は、ますますいい気になつて、竹見のポケットに手をさし入れた。なにをするかとみていると、煙草の入つた箱とマツチとを、だつりやくした。そして、その二つの品物を、こわごわ舷側げんそくから海中へ、ぽーんとすてたものだ。

それでもまだ心配だとみえて、舷側からわざわざ海面をみて、この二つの品物がたしかに水びたしになっているのを確かめている者もあつた。なぜそんなに煙草とマッチが、きらいなのであるうか。

このとき、竹見がさげんだ。

「ちえつ、おれをあまく見て、よくもまあ大勢でもって手ごめにしやがったな、それじゃこつちも、胡瓜の缶詰をかえしてもらおうよ」

どうせ相手にはわからないであろうところの中国語でしゃべつて、さつき竹見が船員中のおとなしそうな一人にくれてやった胡瓜の缶詰を、すばやくうばいかえた。

報復手段なのである。どっちもまけてはいない。

「あつ、それはおれが貰った缶詰じゃないか」

その船員は、びっくりして竹見にとびかかってきたが、彼は相
手にならないで、ひらりとからだをかわした。このことは、その
相手の船員ばかりでなく、附近に立ち並んでいた彼の同僚に少か
らぬ失望をあたえたようである。そうでもあるう、そういう野菜
ものにうえていた彼等は、あたらきゆうりのお裾分けすそわを失つてし
まったのだから。

船員たちは、たがいに顔を見合わせて、なにか早口にどなり合
っていたが、やがて一同は、やっぱり胡瓜の缶詰にみれんがある
と見え、竹見の傍へよつてきて、ぐるつと取まいた。

「こら、その缶詰を、こつちへかえせ」

「さつきおれたちがもらった缶詰だ。こつちへよこせ」

竹見から煙草とマツチをうばいとつたことなどは知らんかおで、多勢を頼んで水夫竹見に肉薄してくるそのずうずうしさには、あきれぬよりほかない。

竹見は、べつにおどろきもしない。ふふんと鼻のさきでわらうと、とびかかってくる奴の腕を、かるくふりはらつて、ぐんぐん前へ出ていく大胆さ。そこで彼は、さつきからこの有象無象うげうむげうとは別行動をとり、ウインチにもたれて、こつちをじろじろしていた一人の、たくましい水夫の前にちかづき、

「おい、お前にこれをやるよ」

と、もんだいの缶詰をさしでした。

すると相手は、にやりと笑って、竹見のさしだす缶詰をうけとつた。

巨人ハルク

「やい、ハルク、その缶詰は、おれたちのものだ。こつちへよこせ」

ハルクというのは、その遅^{たくま}しい巨人水夫の名のようだ。缶詰に

みれんたつぷりの船員たちはハルクの前へおしかけて、うばいかえそうとする。

「……」

巨人ハルクは、一語も発しないで、近づいてくる船員のかおをじろりじろりとながめまわす。そして缶詰をわざと顔の前でひねくりまわして、ごくりと唾をのんでみせたりする。こいつはかえって気味がわるい。

いきおいこんだ船員たちは、猫ににらまれたねずみのように、もう一歩も前に出られなくなった。

「やい、ハルク。意地わるをする、あとで後悔しなければならぬぞ」

ハルクは、どこを風がふくかといったかおであつた。

竹見は、ハルクが、ばかに氣に入つた。彼はそこでハルクの前へいって、右手をさしのばした。

「ハルクよ。お前は世界一の巨人だぞ！」

「ふふん、それほどでもないよ」

ハルクがはじめて口をきいた、しかも片言ながら、とにかくカ広カ東語ントシで……。そして二人は、しっかり握手をしてしまったのである。そこで、さしものめんどうな胡瓜の缶詰事件も、一まず、かたづいた。

こつちで缶詰事件が起つている間に、平靖号から野菜その他をもつてノーマ号へ出掛けた事務長の一行は、とどこおりなく取引

をすませた。ノーマ号の船長ノルマンは、金貨でその代金をはらったが、その支払いぶりは、なかなかよかった。よほど金がある船であるのか、それともよほど野菜類にこまっていたものらしい。「貴船は、これからどこへいかれるのですか」

平靖号の事務長は、中国人らしい発音で、ノルマンにたずねた。「本船は、サイゴンをへて、シンガポールに出るつもりだよ」

ノルマン船長は、たいへんおちついた紳士のように見えた。おそろしくやせぎすで、大きな両眼は、日よけの色眼鏡によって遮し蔽へいされてあつた。

「貴船は貨物船らしいが、なにをつんでおられるのですか」

「鉱石である」

鉾石である——という返事が、ばかにはやくとびだした。まるでさつきからこれをきかれることを予想して、すぐ出せるように用意しておいた返事のように聞えた。

「鉾石というと、どんな種類の鉾石ですか」

ノルマン船長のくちびるが、ぎゅツとまがった。

「もう用事はすんだのだ。いそいで帰^りたまえ」

ノルマン船長は、はじめて叱咤^{しつた}するようにさげんだ。彼の語尾は、かすかにふるえおびていた。

事務長の質問が、ノルマンの気にさわつたらしい。

「ねえ、事務長」

そのとき、事務長のうしろからこえをかけた者がある。それは

一緒にノーマ号へのりつけた一行の中の一名、丸本という水夫だつた。

「なんだ」

「本船からの信号でさあ。はやくかえってこいといつてますぜ」
事務長は、うむとくびをふつて、

「ああ、いますぐかえると、手旗信号で返事をしてくれ」

「ねえ、事務長」

「なんだ。まだなにかあるのか」

「へえ、もう一つ、やっかい厄介なことをいつてきました。虎船長から、
じきじきの命令でさあ」

といって、常日ごろ、ばかに年寄りじみたことをいうので、

「お爺じい」と綽名あだなのある丸本水夫だが、すこし当惑とうわくの色が見える。

「なんだ、やつかいなことというのは」

「ほら、あの竹たけのことでさあ。さつきわれわれ一行の中に紛れまぎこんでいましたね。彼奴はカンバスの下に野菜と一緒にごりつぶくになってかくれていたんですよ。ところが虎船長、大の御立腹ごりつぶくですわい。いままも船からの信号で、竹の手足をしばってつれもどれとの巖命げんめいですぜ。ようがすか」

「ふむ、そうか。竹見……いや竹の手足をしばってつれもどれと、船長の命令か。無理もない、船長の許可なくして船をぬけだすことは、一番の重罪だからな」

「じゃあ、やりますかね」

「なにを？」

「なにをって、竹の手足を縛しばつてつれてかえるかということですよ」

「もちろんだ。なぜそんなことをきくのか」

「だって、彼奴は大力があるうえに、猿のように、はしっこいのですからね。こつちがつかまえると感あづくと、この船内をはしりまわって、なかなかつかまえられませぬぜ」

「ふーん、それはお前のいうとおりだな」

と、事務長はうらめしそうなかおになって、本船の方をふりかえった。本船の甲板では、虎船長が、椅子のうえにどつかとすわって、こつちをにらんでいた。

投げナイフ^な

「おい、こまったな。お前一つ、骨をおつてくれないか」

「えっ」

「お前は竹と仲よしなんだろう。だからお前がむかえば、竹は反抗しないでつかまるだろう」

「ごめんこうむりましょう。そんなことをすれば、わしや、ねぎめがわるいや。とらえられりや、どうせ竹の野郎は、死刑にならないまでも、船底に重禁錮^{じゅうきんこ}七日間ぐらいはたしかでしょう」

丸本は、なかなか承知をしない。

事務長も、これにはかえす言葉もなかったが、さりとしてこんなところにぐずぐずしているわけにもいかない。

「竹の刑罰のことは、おれが保証して、かるくしてやるから、お前まえ一つつかまえろ」

「困ったなあ。重禁錮にしない約束、くい物と酒はたっぷり竹にやってくれる約束、それなら引受けますぜ。わしや計けいりやく略をもつて、竹のやつを縛っちまいまさあ」

「くうものはくい、のむものはのむ囚人なんて聞いたことがないが……仕方がない、おれが虎船長にとりなすから、はやくお前はかかってくれ。おれたちはこつちで、おとなしく控ひかえている、し

かし加勢をしると合図あいずをすれば、すぐとびかかるから」

「ようがす。じゃあ、いまの約束は、男と男との約束ですぜ。ま
ちがいなしですぜ」

「うん、くどくいわなくてもいい。まちがいなしだ」

ノルマン船長を前にして、二人は気がねをしながらも、早口の
相談一決！

そこで丸本は、ノーマ号のものの方へ、のこのことにかけてい
った。それと入れかえに、事務長は、部下を彼のかたわらへよび
よせて、いつでも丸本に加勢のできるように用意をした。

丸本は、どんな計略をもっているであろうか。彼の歩いてい
く後から見ると、いつの間にか麻紐あさひもで輪をこしらえて、かくし

持っている。

「おい竹……おい、竹」

丸本に呼ばれて、竹見は知らぬが仏で、安心しきってノーマ号の船員の間をかきわけ、前へ出てくる。

「おい竹よ。いま事務長さんから特別手当が出た。ほら、わたしよ。手を出せ」

「なんだ。特別手当だって、いくらくれるのか知らないが、はて、あの事務長め、いつからこんなに気がきくようになったか」

と、ひよいと手を出すところを、丸本がまっぴり、麻紐の輪をかけてしまった。

「あっ、おれをどうするのか」

「わるくおもうな、おとなしくしろい。お前を縛ってつれもどれと、虎船長の命令だ」

竹見は、しばらく目をぱちぱちしていたが、

「いやだい。あんな船へ、だれがかえるものか。お前、おれを売つたな」

「売つたなどと、人聞きのわるいことをいうな。これもお前のためだ。わしは飯めしも酒も……」

「いうな、うら切りお爺じいめ！ お前なんぞにふんづかまってたまるかい」

といつてはねのけようとする。そのときばたばたとかけてきたのは、待機中の事務長をはじめ派遣隊の連中だった。この連中に

そうがかりになつては、大力の竹見といえどもどうにもならない。「おーい、ハルク、だまつてみていないで、おれをたすけてくれ。おれが捕つて本船へつれもどられると、死刑になつちまうんだ」それを聞くと、ハルクはウインチの下からのっそり前に出てきた。彼は、太い筋の入つた両腕を、ゆみのようにはつて、竹見の加勢をすると見せた。

「よせよせ、ハルク」

他の船員たちが忠告した。しかしハルクは缶詰をもらったおれいの方だけ、力を出すつもりであつた。

平靖号の船員対ハルクの乱闘のまくは、今にもノーマ号の甲板の上に切つておとされそうになつた。

そのとき竹見は、ハルクの後へ退^{さが}っていたが、睨^{にら}み合いの相手丸本をいつになくきたない言葉でののしり、

「やい、うら切り者よ。これが受けられるなら受けてみる」

というなり、竹見の掌^{てのひら}からびゅーんといきおいよく、一挺のナイフが丸本の方へとんでいった。竹見のなげナイフ。丸本のとめナイフ——といえば、平靖号の名物の一つだ。どっちも神技というべきわざをもっている。だが今は曲^{きょく}技^ぎくらべではない。丸本は、竹見が自分に殺意を持って見ると見て、大立腹^{だいらつぷく}だ。びゅーととんでくるナイフを、ぴたりと片手でうけとめ、ただちに竹見の心臓をねらってなげかえそうとしたが、そのとき妙な手触^{てざわ}りを感じた。見ると、ナイフの柄^えに、シャツをひきちぎったような布

ぎれがむすんであつた。

「おや！」

と叫んだ、丸本はその布ぎれに、なにか字が書いてあるのに気がついた。

火薬船

丸本は、はつとおもつた。

どうも、さつきから、竹見のそぶりという奴が、
一いっ向こう腑ふにお

ちない。あれほどの仲良しの竹見から、ナイフを、なげつけられようなどとはまったく想像もしなかつたのである。でも、とんでくるナイフは、ぜひ受けとめねばいのちにかかわる。そこで、こつちも手練の早業はやわざで、やつとナイフを受けとめてみると、そのナイフの柄ぬのに、布ぎれがついていたのであつた。それにはおどろいた。

いや、愕おどろきは、そればかりではない。その布ぎれには文字がしたためてあつた。彼は、すばやくその文字を拾いよみした。

“火ヤク船ダ。オレハノコルヨ”

彼は、たてつづけに二三度、それをよみかえした。しかし、そのいみを諒解りようかいするには、まだその上、五六度どもよみかえさね

ばならなかつた。そして、その真意がわかつたとき、丸木のからだは、昂こうふん奮でぶるぶるふるえだした。

「うむ、〃火薬船だ、俺は残るよ〃 そうか、このノーマ号は火薬をつんだ船なのか、それで、竹見のやつが、この船にのこるといふのか」

丸本は、ちらと、竹見の方に、すばやい眼をはしらせた。

〃どうだナイフにつけてやった手紙の文句のいみが分るか〃
と、いいたげな竹見の目附であつた。

「竹見の奴、このノーマ号が火薬船だから残るといふが、火薬船なら、なぜ残らなければならぬのか」

こいつは、ちよつとばかり謎がむずかしい。丸本には、竹見の

意中が、どうもよく分らなかつた。が、それが分らないといつて、ぐずぐずしていられないこの場であつた。

そのとき、丸本のかたをたたいたものがある。それは事務長だつた。

「おい、丸よ。なにをぐずぐずしているんだ。はやく、その麻あさひ紐もを、手元へ引ひっぱれ」

そうだ、麻紐の一端が、脱船水夫の竹見の片手を、しっかりと捉えているのだ。竹見はこの船に居残るといふ。しからば、この紐をはなしてやらなければなるまい。といつて、この場合、下手なはなしようをすれば、ノーマ号の船員どもにさとられるから、竹見の後のためによりしくあるまい。日ごろ、和尚おしよさんのように

おちついている丸本水夫も、こうなつては、煙突のうえで、きゆうに目かくしされたように、狼狽ろうばいしないではいられない。

でも、ぐずぐずしてはいられなかつた。すすむにしろ、しりぞくにしろ、ここで一秒たりともためらつてゐることはゆるされな
いのだ。彼は、ついに決心した。

「こらッ、竹の野郎！　もう誰がなんといつても、おれがゆるし
ちやおかないぞ。手前てまえの生命は、おれがもらつた！」

すさまじく憤怒ふんどの色をあらわし、なかなか芝居に骨がおれる丸
本は、竹見の手首を縛つた麻紐を、ぐつと手元へ二度三度手繰たぐつ
た。

すると竹見の身体は、とんとんと前へとびだして、つんのめり

そうになった。

「うん、野郎！」

ハルクが、たくましい腕をのばして、横合よこあいから麻紐をぐつと引いた。

とたんに、麻紐が、ぷつんと切れた。

「あつ」

「うーむ」

丸本も竹見も、前と後うしろのちがいはあるが、ともにどつと尻餅をについて、ひっくりかえった。巨人ハルクさえが、あやうく足をさらわれそうになった。——麻紐は、なぜ切れたのか。それは丸本の早業だった。手ぐるとみせて、彼は手にしていたナイフで、麻

紐をぶつんと切断したのであった。

巨人ハルクは、ゴリラの如く、いかった。

「な、生意気な！ もう勘弁がならないぞ！」

と、大木のような両腕をまくりあげて、じりじりと前へ出てくる。

これを見て、おどろいたのは、丸本よりも平靖号の事務長だった。いや、事務長ばかりでない。その後につきしたがう平靖号の乗組員たちであった。いよいよこれは、ものすごい乱闘になるぞ、そうになると、最早もはや生きて本船へかえれないかもしれないと、顔色がかわった。

丸本も、立ち上って、今はこれまでと、みがまえた。

巨人ハルク、その後には水夫竹見、そのまた後に、ノーマ号のあらくれ船員どもがずらりと、一くせ二くせもある赤あかづら面が並んで、前へおしだしてくる。ノーマ号の甲板かんばん上に、今や乱闘の幕は切つておとされようとしている。

甲板のうえは、たちまち鼻血で真赤に染まろうとしている。こうなつては、どっちも引くに引かれぬ男の意地、さてもものすごい光景とはなつた。

俺は若い！

「みんな、停やめろッ！」

とつぜん、晴天の雷らい鳴めいのように、どなった者がある。

船長だ。ノーマ号の船長、ノルマンだ。いつの間にか、船長ノルマンは、双そうほう方ほうの間へとびだしていた。

「おお」

「うむ、いけねえ」

双方とも、ぎくりとして、にぎりこぶしのやり場に当とう惑わくした。「こらッ、喧けんか嘩かしたいやつは、こうして呉くれれるぞ」

ノルマン船長の足が、つつと前に出たかと思うと、彼の両腕が、さっとうごいた。と思うとたんに、彼の両腕には、すぐ傍にいた

平靖号の水夫一名と、ノーマ号の水夫一名とが、同じく襟えりがみをとられて、猫の子のように、ばたばたはじめた。このほそっこい船長には、見かけによらない力があつた。そのまま船長は、つつと甲板をはしつて、

「えいッ。」

というど、二人の水夫を、舷からつきおとした。おそるべき力だ。船長は、或る術を心得ているのかもしれない。

どどーンと、大きな水すい音おんがした。

「どうだ。後の奴も、海水の塩しお辛からいところを嘗なめて来たいか。

希望者は、すぐ申出る」

と、威風堂々と、あたりを見まわしたが、そのいきおいのはげ

しいことといったたら、見かけによらぬノルマン船長の怪力を知らない者は、窒息ちっそくしそうになつたくらいである。

「おい、みんな。帰船だ」

事務長は、そういつて、ノルマン船長に、型ばかりの拳手の礼をおくると、自分はいそいで、舷側に吊つた繩梯子なわぼしこの方へ歩いていつて、足をかけた。

丸本が、その後につづいた。

そうして、一同は、大急ぎで繩梯子をおりて、ボートにうちのつた。

「漕こげ！」

事務長は、舵かじをひきながら、命令した。

「竹見の奴は、あのままでいいのですか」

と、一人の水夫が聞いた。

「うむ——」

と、事務長は、答えにつまった。

「仕方がないじゃないか。それとも、お前に智恵でもあるか」

これは丸本の言葉だった。

水夫は、だまつてしまった。

ボートは、だんだんとノーマ号からはなれていく。事務長は、舵をとりながら、ノーマ号の船上に、脱走水夫竹見のすがたをもとめたが、どこにいるのか、さっぱり分らなかつた。ただそこには、ノーマ号の水夫たちが、おもいおもいに、こつちを馬鹿にし

きつたかおで、見おくつていた。

まつたくのところ、馬鹿にされたようなこのボート派遣であった。

さて竹見は、一体どうしたのであろうか。彼は、前から退船の意志をもっていた。その理由は、虎船長に具申ぐしんしたたびに、後にしろとかたづけられてしまったが、彼の真意は、駆逐艦松風の臨検隊員をむかえて、ああ自分も志願して、天晴れ水兵さんになって、軍艦に乘組み、正規の御奉公したいと、急にそういう気にかわったのである。すると、中国船平靖号の一員として、そのままいることが厭いやになった。そこへ虎船長には、こつぴどくおこられる。どうにでもしろと、こつちも中ツ腹ちゆうばらになつていとこころへ、

ボートがノーマ号に出かけることになったが、こいつがまた虎船長から、はつきり停め^とられてしまったので、どうせ怒られ^っ序^{いで}だとおもつて、脱船をしてしまったのである。

そういうことはよくない事だった。船長の命令をまもらないのは、わるいことだと、竹見は百も二百も承知していた。しかしながら、彼はわかかった。海へ出て来たのは、生命^{いのち}をまとに、おもいきり冒険をするためだった。若い者は、なんでもはやいところむさぼり食^くいたい。冒険味だつてそうだ。平靖号乗組員として参加したのもそうなら、水兵さんになりたいとおもつたのもそうである。三転して、ノーマ号へいって、外人のかおを見ないではない。られない衝動にかられたのも、やっぱりそれだった。若い者は、

気もみじかい。ことに竹見にいたっては、非常に気がみじかい。気がみじかいことは、一めんから見れば、たいへんよろしくない。しかし他の一めんから見れば、それほど心が目的物にむかってもえている証拠であつて、若い者なればこそその特長である。

気がみじかいという性質を、悪いところへ用いてはよくない。

我^{わがまま}儘と混同せられるからである。しかし、気がみじかいという

性質を、良いところへ用いれば、ずいぶんという仕事が出来る。

今の世に、仕事をしない人間は、無駄であり、邪魔でさえある。気みじかを善用して、どんどん仕事をはこんでいい若い者は、大いにほめてやっていい。そういう気みじかい若者が、少ければ、国家は亡びるのじゃないかと思う。

とにかく、竹見は、気がみじかく、冒険を慕ってどんどんうごいていくうちに、秘密の火薬船ノーマ号のうえに、ただ一人取りのこされてしまったというわけである。

“死に神” 船長

ノーマ号を火薬船だと、観察した竹見の眼力がんりきは、なかなかえらいものだった。

煙草たばこを甲板かんばんで吸うと、船員たちが顔色かおいろをかえた。—— たつ

たそれだけのことで、竹見は万事をさとつたのである。

（火薬船とは、こいつは有ありがた難い！）

竹見は、思いがけない宝の山をほりあてたように思った。これなら、彼のあこがれている冒険味百パーセントの世界だ。彼は、当分この船で、スリルを満まんきつ喫したいとかんがえた。

それだけではない、竹見をしてこのノーマ号に停まらせた理由があつた。

それは外でもない。この切迫した世界情勢の下において、ホシコ香港ンの南方を、変な国籍の船が火薬を満載して、うろろうしているなんて、どうもただ事ではないとおもつたからである。

（ふむ、この火薬船が、どこでなにをやるつもりなのか、これは

日本人としてうっかりしてられないぞ！)

そうおもった彼は、得^えたりや応^{おう}と、ノーマ号でがんばることに決めてしまったのである。ノーマ号が、これからなにをするか、それを監視してやろう。これはきつとおもしろいことになるぞと、ほくそ笑^えんだのである。

巨人ハルクを、いちはやく味方につけたことは、竹見のはやわざいであつた。竹見は、ハルクさえ味方につけておけば、あとはこの船に停^{とどま}ることなんて、わけはないものとかんがえていた。なにしろ、中国人水夫はよく働くことは、世界中に知れていることであるから、ハルクの口ぞえで、簡単に船長ノルマンにとりなしてもらえるものと決めていた。

ところが、事實は、そうかたんには、いかなかつたのである。死に神”という^{あだな}綽名のあるこの秘密の火薬船の船長ノルマンだつた。これが一通りや二通りでいくような、そんな他愛のない船長とは、船長がちがうのであつた。

「おい、ちよつと、ここへ出てこい！」

船長ノルマンは、船橋のうえから、甲板へこえかけた。これもちよつとした中国語をつかう。

「へえ、——」

竹見は、わざと頭腦の**にぶ**そうな声で、返事をした。

「へえじゃないぞ。いそいで、ここへ上つてこい」

船長の語気は、一語ごとにあらくなつていく。

(船長め、どうしたのかナ)

竹見は、白刃はくじんで頸くびすじをなでられたような気味のわるさを感じた。

「へえ、ただ今」

とこたえて、竹見は、ハルクに、ちくりと目配めくばせした。

ハルクは、無言のままあごをしゃくつた。

(船長のいうとおり、船橋せんきょうへのぼれ)

といつているのである。

竹見は、にやツとわらって、いそぎ足で、昇降段しょうこうだんをのぼつ

た。

下から、ほッほッという嘆声たんせいが聞えた。竹見がましらのよう

に身軽にのぼっていったのを、水夫どもが感心しているらしい。

「へえ、なにか御用ですか」

と、竹見はぬつとかおを前につきだした。

船長ノルマンは両腕をくんで、けわしい目つきで、竹見をじつとにらみつけた。

「貴様は、なぜ本船へかえらないのか」

するどい船長の質問だ。

「へえ、私はもう、あの船へかえりたくないんです」

「なぜ。なぜか、そのわけをいえ」

「かえれば、死刑になりますからね」

「なぜ死刑になる？」

「へえ、それは——」といったが、竹見はちよつとどぎまぎした。「それはその、仲間をちよいとやって、監禁されていたんですか。丁度よ。死刑になる日まで、どこに待つやつがあるもんですか。丁度いい塩梅あんばいに、ボートがこつちへ出るということを聞いたもんで、それにもぐりこみやした」

竹見は、口から出まかせを、べらべらしやべりながら、よくまあこうもうまいことが喋しゃべれるものだど、自分ながら感心した。船長ノルマンは、苦にむしが虫をかみつぶしたようなかおをして、聞いていた。そして竹見の言葉がおわっても、そのまま無言で、竹見をにらみつけていた。

あまりいい気持のものではない。

二三分たった後のこと、ノルマンは、熱が出た病人のようにか
らだをぶるぶるとふるわせると、はきだすようにいった。

「うそをつけ、小僧。貴様は日本人じゃないか！」

てごわ
手剛いノルマン

水夫竹見は、肚はらのなかで、あつとさげんだ。

“うそをつけ、小僧、貴様は、日本人じゃないか！”

と、船長ノルマンから、だしぬけに一かつをくらわせられたの

である。全く不意打ふいうちをくらったので、びっくりした。だが、竹見は、こういうときのしぶとさについては、人後におちない自信があつた。

(ふん、なにをぬかすか)

と、口の中でいつていた。

「どうだ。ちゃんと、当つたらう。当つたら、すなおに、日本人ですと白はくじょう状しろ」

船長ノルマンは、威丈高いたけだかになつて、竹見をきめつけた。

「日本人だったら、大人たいじんは、なにか、わしに呉れるんですかい」

「よくばるな。貴様に何一つ、呉れてやる理由があるか」

「なあんだ。それじゃ、日本人であつてもなくても、同じことだ。」

つまらねえ」

と、いいすてて、竹見は、船長にくるりとしりをむけて、むこうへいこうとする。

「さて、小僧、まだ話はすんじやいななのだ」

船長ノルマンは、ふたたびどなりつけた。

「やれやれ、まだ話が、のこっているのですかい」

竹見は、わざとつまらなさそうな顔をして、もどつてきた。

「貴様は、相当ずうずう凶々しいやつだ。一たい、誰のゆるしを得て、

このノーマ号のうえを歩いているのか」

「わしの気に入ったからですよ」

「なにッ」

「おどろくことはありませんや。船長さん、あなただつて、この船が気に入つてればこそ、こうしてノーマ号にのつて、船長とかなんとかを引きうけているのでしよう」

竹見は、おそれ気げもなく、いいはなした。

「ふふん」

さすがに、船長ノルマンは、おちついたものである。はらを立てないで、鼻さきでちよつとわらつたばかりだ。

「とにかく、貴様みたいなわけのわからない小僧には、貴重な本船の食糧を食べさせておくわけにはいかん、日本人ならともかくもだが、中国人などに、用はない」

「……」

「用はないから、貴様をかたづけしてやる。わが輩の腕力が、いかに物をいうかについては、貴様もさつき舷ふなばたをとびこえて二匹の濡ぬれねこが出来あがったことを知らないわけじゃあるまいね。どうだ」

船長ノルマンは、さつき二人の水夫を、舷ふなばたごえに、海中へなげこんだことをいつているのであろう。

「よわい者を、おどかしっこ無しだ」

「なにを、ぐずぐずいうか」

船長ノルマンは猿臂えんぴをのばして、水夫竹見の襟えりがみ髪かみをぐつとつかんだ。怪力だ。竹見はそのままひつさげられた。足をばたばたしたが、足の先に、どうしても甲かんぱん板ばんがさわらないのであった。

それでは、どうすることもできない。

「さあ、どうだ。このまま舷へもって行って、ぽいとすててやろうか」

「なぜすてるのか」

「わかっているじゃないか。この船に、中国人なんか、用はないんだ。それとも、まつすぐに日本人だと、白状するか」

ノルマンは、どこまでも、竹見に白状させるつもりだ。

「船長さん、さつきから、何度もいつているじやありませんか。

わしは日本人が大きらいなんですよ。それにも拘かかわらず、あなたと

いう人は、なんでもかでも、わしを日本人にしてしまわないと承知ができないらしい。それは無理ですよ。いや無理などころか、

無茶ですよ」

竹見は、どこまでも、中国人でがんばる決心だった。

「まだ、白しらぼくれて、そんなことをいうか……」

と、船長ノルマンは、憎にく々しげにいいはなつて、竹見の襟髪をもったまま、猫ねこの仔こでもあつかうようにふりまわした。

竹見は、もうなにもいわなくなつた。ていこうもしない。そして怪力船長の腕が、もうそろそろくたびれて、自分を下におろすだろうとまちかまえていた。が、船長ノルマンの腕は、なかなかしつかりしている。

「よオし、貴様は、日本人でないことが、よくわかつたぞ」

「えっ、中国人だということがわかりましたか」

「うふん。たしかに貴様は中国人であるということにしておけ。しかしよく見ているがいい、今に吠えつらをかかないがいいぞ。そのときは、なにをいってもおそいんだぞ。それまでは、この船で貴様を、やとつておいてやる」

そういつて船長ノルマンは、ふりかえつて、いみありげに、はるか後方の海面に目をやった。

そこには、船足のおそい平靖号の船影は、もうかなり小さくなって、おくられているのが見えた。

ノルマンは、胸の中になにをかんがえているのであろうか。

虎船長の決心

こっちは、平靖号の船上。

虎船長は、不自由な身体を、船長室の籐椅子のうえにおいて、
ぷんぷん怒っている。

その前には、ノーマ号へ派遣され、野菜などを金貨にかえてきた事務長をはじめ、一行の若者たちが、かしこまっている。

「火薬船だというが、はたして本当かどうか、なぜもつとはつきりしらべてこなかつたんだ。竹見の奴が、脱だっせん船せんしたい一心で、火薬船などと手前てまえをつくろう手もないではないからかう」

事務長は、髭面には似合わず、少女のようにはじらいながら、

「どうもソノ、あの場合ぐずぐずしていると、こつちの部下たちが、みんな海の中に、なげこまれそうになったもんでしてナ。なにしろ多勢たせいに無勢ぶせいというやつです。そのうえ、向こうは、なかなか手剛てごわいごろつきぞろいなんです」

と、弁解に、これとつめているが、虎船長には、はら立だたくしくひびくばかりだった。

「もし火薬船というのが本当のことなら、ノーマ号へのこるといった竹見の奴は、さすがにわしの部下らしく見上げた者じゃ。じやが、あの男は、どうもたちがわるいから、俄に信用はできない」
「ええ船長、竹見のいっていることは、本当です。間違いはあり

ません。私は太鼓判を捺おしますよ」

そういったのは、竹見の相棒あいぼうの水夫丸本だった。彼は、竹見から、密書のついたナイフをなげつけられ、それをうまくうけた男だ。

虎船長の眼が、ぎよろりと光る。

そのとき、入口の扉をノックして、入ってきたのは一等運転士の坂谷だった。

「船長。どう決心がつかれましたか」

「ああ、わが艦隊へ無電を打つことか」

じつは、ノーマ号が火薬船だという報告があつたとき、坂谷はこの事実をすぐさま、艦隊へ報告しておくのがいいと進言したの

だった。しかし虎船長は、なるべく無電を打ちたくない主義だった。なにしろ中国船のつもりであるから、あまりスパイ船のようにはきはきした行動をとりたくないこともあつたし、とかく無電という奴は、四方八方ひろがるので、ぬすみ聞きされる。その結果、平靖号があやしまれて、今後の行動が、制限せられるようだとこまるとおもつたのである。

「ねえ、一等運転士」

と、虎船長は、深刻な表情をして、

「やはり、艦隊へ無電をうつことは、当分見合わせよう」

「そうですか。見合わせますか」

もと、海軍の下士官だった坂谷は、ちよつと不満のようである。

「その代り、じゃ。わが平靖号は、これから極力、ノーマ号の後をつけていくことにしよう。そして、ノーマ号がなにをはじめるかを十分監視して、確実にあやしい事実をつきとめたら、そのときは、こっちは、平靖号を犠牲にしても、艦隊へ報告する。そういうことにしては、どうか」

虎船長は、さすがに船長らしく、どこまでも慎重にやろうというかんがえだった。慎重にやって、いよいよその場にのぞめば、大犠牲をはらう決心もしているというわけだった。

「ああ、そんなら、結構でしょう。一つ石炭をうんとたいて、ノーマを追いかけましょう」

坂谷も、ついに同意した。水夫丸本が、につこりわらった。相

棒の竹見と、いよいよ永のお別れかと、かなしんでいたのに、こへ来て、きゆうに、彼ののりこんでいるノーマ号を追いかけることになった。竹見に会う機会も、必ず出来るであろうと、丸本の胸は、にわかにおどりだした。

「おい、坂谷一等運転士。今のノーマ号の針路は、どっちへ向いているのかね」

虎船長が、質問した。

「はい、さつき南西へ針路をてんじました」

「ほう、南西へ。どこへいく気かな」

「その見当では、近くに海南島がありますが、まさか海南島へは、いかないでしょう。結局、仏領インドシナのハノイか、それとも、

ずっと南に下りて、サイゴンへ入るか、そのどっちかでしょうと
思います。

「ふむ、どっちにしても、相当の長い航程だ。ノーマ号を見うし
なつちや、おしまいだから、ひとつ石炭をどんどんたいて、やつ
にくつついて、はなれないように船をやれ」

虎船長は、そこではじめて、にやりと笑顔を見せた。

謎の人物

そのころ、南シナ海を中心とする界限かいわいの各国官辺すじで、ポーニンと名のる白人のことが、しきりに問題になつていた。

ポーニン氏は、トマトのようにかおの赤い、そして桃のような白い毛が密生した、小柄の白人であつた。彼は、白系ロシア人であると自ら称していたが、だれも一ぺんでそのようなことを信じる者はなかつた。

このポーニン氏は、身体の小柄ににあわず、ひどく心臓のつよい人物で、相当の金をもっているようにいつていたが、ときには宿屋の払いにもさしつかえることなどもあつて、まことに複雑怪奇な人物といふべき人物だつた。

彼は、なにか仕事でもさがしているらしく、しきりに南シナ海

を中心に、あっちへいつたり、こっちへ来たりしていた。

さて、この物語は、彼ポーニンが、インドシナの南方の海岸サイゴン港にやってきてからのちに始まる。

サイゴンといえば、ちかごろは、わが欧州航路の汽船でかならずよつていくという重要な貿易港であつて、米、チーク材、棉花などを輸出し、パリ―風の賑にぎやかな町で、フランスの東洋艦隊の根拠地でもある。

フランスの守備軍司令部に属する警備庁の、奥まつた一室では、長官アンドレ大佐以下の首脳部があつまつて、しきりに会議の最中である。

「おい。たしかに、ポーニンにちがいないんだね。容貌ようぼうや、身

長なども、よくしらべてみたかね」

と、大兵肥満のアンドレ大佐が、係の警部モロにいった。

「長官閣下、そのへんは、念入りによくしらべあげてあります。

容貌や身長だけでなく、指紋までもしらべました。全く、例のポ
ーニンにちがいません」

「じゃあ、ただ一つちがつているのは、名前だけなんだね」

「そうです。フランス氏と名乗っていますが、もちろんこれは変
名です。フランス氏などという名前は、フランスにだって、そう
沢山ある名前じゃありませんからね」

「よし、わかった。では、謎の人物ポーニンに相違ないものとし
て、話をすすめよう」

と、長官アンドレ大佐は、大きく肯うなずいて、

「そこでじゃ。ポーニンが、しきりにセメントを買いあつめてい
るといふが、それは本当か」

「本当ですとも。まだ口約束だけのことですが、私の部下のしら
べてきたところによると、こんなにあります。このとおり、全部
あつめるとたいへんな量です」

警部モロは、鞆の中から、いろいろな形の紙を重ねあわせた書
類束をとりだした。

「ええと、これが五百袋。こっちの商会が、千二百袋。またこっ
ちは、三百袋。……」

「合計して、どのくらいになるのか」

「ぎつと勘定しまして、九百トンです」

「ふーン、九百トンのセメントか。相当の分量だ。そんなセメントを買いこんで、どうする気かな」

「当人は、今にセメントが値上りするから、買いしめておくのだ、^{ねあが}といっているそうです」

「すると、値上がりのところ、売つてもうけるつもりなんだな。すると、単に、目さきの敏い商人でさとしかないではないか」

長官アンドレ大佐は、そういつて、卓子テーブルにあつまっている首脳部の人たちのかおを、ずーと見まわした。

「それは、どうもおかしいですな」

「ポーニンが、金儲けもうだけに、うき身をやつしているとは思われ

ませんねえ。イギリス大使からの内報をよんでも、単に、それだけの人物とはおもえない」

席上では、誰も、ポーンが、今日さきの敏い商売だけをやっているものとは信じない。

「おい、モロ警部。報告材料は、もうこれで、おしまいなのか。想おもいの外、すくないじゃないか」

長官は、モロの方に不満そうなかおをむけた。

「ああ長官閣下。じつは、もう一人、報告をしてくるはずの者がいるのですが、とうとうこの時間に間にあいませんでした。すみませんです」

「もう一人というと、誰のことだ」

「は、それは……」

といつてるところへ、卓上の電話が、じりじりとなりだした。警部モロは、発条パネじかけの人形のように、その受話器にとびついた。

「——なんだ、なんだ。ポーニンが、しきりに船をさがしているつて、汽船を買いたいといつているのか。うむ、そいつは、すばらしいニュースだ」

警部モロは、電話で相手とはなしながら、長官アンドレ大佐に、
仰ぎようぎよう々しい目配せをした。

セメント問答

怪人物ポーニン氏の行動は、もはやそのままに見のがす事はできなかつた。

警備庁長官アンドレ大佐は、うでききのモロ警部に命じて、自称フランス氏のポーニン氏と会見させることとなつた。そのうえで、ポーニン氏が、なぜ九百トンもの多量のセメントを買いこんだのか、一応その事情について説明をもとめること。それと同時に、もし出来るならば、ポーニン氏は本当は何処の国籍を有する人物で、東洋へ来て、何を目標に活動をするつもりなのか、そこ

らのところも探偵すること。この二つのことについて警部モロは、命令をうけたのだった。なかなか容易ならぬ仕事だった。

警部モロは、この命令をうけるや、この町に出張所を持つ極東セメント商会出張所の外交員に、はやがわりをしてしまった。この商会のセメントは、値段が高いため、前になぞのポーニン氏から一度はなしはあつたが、取引はなく、そのままになっていたのである。警部モロは、またそのうち、きつとなぞのポーニン氏から口をかけてくるだろうからそのときは長官アンドレ大佐からめいぜられた任務を遂行しようと、網をはって、まっていたのである。

もちろん、警部モロの身分については極東セメント商会の出張

所長と、秘書課員だけが知っていて、他の社員には、それを知らせてなかった。それは、あくまで事を秘密にはこぶためだった。

二三日経って、この商会へ、自称フランス氏から電話がかかってきた。それによると、セメントを購こうにゆう入したいが、この前申出のあつた値段は高すぎるからすこしかんがえなおしてくれないか、返事を至急ほしいということだった。

商会では、この返事をするため、警部モロがポーニン氏のところへ派遣されることとなった。すべてはかねて仕くんでおいた芝居の筋書どおりであつた。

警部モロは、ポーニン氏を、そのホテルへ訪ねていった。

ポーニン氏は、今起きたばかりのところだといって、はればっ

たい^{まぶた}瞼を、こすりながら、応接室へ出てきた。

一通りの挨拶があつて、値段のはなしになつたが、今度はポーン氏の腰は、すこぶる妥協的であつて、ほとんど極東セメント商会の言い値でもつて、^{はなし}話がまとまつた。

そのときモロはいった。

「ああもし、フランス様」

と、ポーン氏の偽名のとおり呼び、

「じつは、手前の店の倉庫に、すこぶる格安のセメントが、相当多量にございますのですが、お買いもとめくださいませでしよ
うか」

ポーン氏は、ぴくりと眉^{まゆ}をうごかし、

「格安のセメントという」と

「さようですな、お値段のところは、まあ殆んど半額みたいなものでございます。まったく、ばかばかしい値段で……」

「それは、どうした品物かね。つまり品質のところは、どうだね」「いや、その品質という奴が、すこし他のものとはかわって居りましてナ、そのところが値段をお安くねがっているところでございますが、つかいみちによつては、りっぱに使えますので……」

モロは、わざと、相手の求めているのを、知らんふりをして、自分に都合のいい方へ引張りこんでいく。なかなか達人なものだつた。しかしポーニン氏も、二くせも三くせもある人物である。うまく警部の手にのるかどうか。

「値段のところは、まあどっちになつてもいいんだが、普通品に比べてその品物の欠点というと、どんなことかね」

「実は二三の欠点がございます。まあしかし、そのうち主な欠点というのは、太陽の光線に会いますと、表面が白くなつてまいります。つまり一種の風化作用が促進されるというわけですナ」

「ああ、太陽光線による風化作用か。そんなことはどうでもいいが、その他の欠点というのは……」

モロは、腹の中で、にやりと笑つた。

（うふ、ポーニン奴。太陽光線のことはどうでもいいといったが、するとポーニンのやつは、例のセメントを、太陽の光が届かないところで使うことを白状したようなもんだ。ふふふふ）

だが、モロは、それを顔付かおつきには一向出さず、

「あとの欠点は、それほど目立ったものではありませんが——まあもう一つは、つまりソノ、潮風とか塩気に当たりますと、くろい汚点が出てまいりますんで」

といって、モロは、ポーニン氏の顔色を、じつとうかがった。

恐ろしき予感

「黒くなるというのは、品質が変わるという意味なのかね」

とたずねるポーニンの言葉つきには、真剣な色がうかんでいるようであった。

モロは、腹の中で、ふふふと、微笑をきんじ得なかった。

（ははあ、ポーニンの奴は、買いこんだセメントを、海洋方面で使うんだな。とうとう大事なことを白状してしまったようなものだ。俺も、なかなか大したうでをもっているわい）

だが、それはむねから下に、おさえておいて、

「いや、黒く色がつくだけのことで、べつに品質が変わるという意味ではございませんので……」

「もう他に、どんな欠点があるのか」

「いや、もうあとに、なにもありません」

「そうか。ではすこしかんがえたうえで、買うか買わないかを、はつきり決めよう。そのうちに、僕の方から電話をするからね」

「へい、どうもありがとうございます。どうぞよろしく」

警部モロは、ポニーに別れると、すぐその足で、警備庁へかけつけた。

「おい、どうだったか、モロ警部」

「ああ、長官。ポニーの奴は、はなはだ奇怪なところへ、あの多量のセメントを売りこむようですよ」

「ふん、そうか。それで……」

「第一に、そこは太陽の照^てっていない場所です。第二に、そこは、塩分がある場所なんです。どうです、お分りになりますか」

アンドレ大佐は、首を横にかしげて、怪訝けげんなかおをした。

「なんだ、それは。まるで謎々パズルのだいみたいではないか。このいそがしいのに、そんな遊戯はよそうではないか」

「はははは。長官閣下、これは、遊戯的な謎々ではありません。

現下の国際情勢の複怪奇性ふくかいきせいを解く重大な鍵の一つでありますぞ」

「ほう、モロ警部。はやく結論をいつたがよい」

長官アンドレ大佐は、自分の長い髭ひげを指先で、ちよいとおしあげた。

「つまり、長官閣下、これはポニーニンの買いこんだセメントが、海底でつかわれることを物語っているのです」

「なんじや、海底でセメントを使う？」

「そうです。そのセメントは太陽光線で風化するぞと、私はポーンにいったんですが、そんなことは平気だ、というのです。これはつまり風化をおそれないのではなくて、そこには太陽光線がとどかないから、だからおそれないという意味なんです。太陽光線のとどかないところといえば、地底か海底か、そのいずれかです」

「なるほど、手のこんだ推理だ」

長官は、別の髭の方に、指先をうつした。

「それから私は、潮風や塩分によつて、そのセメントはすぐくろくなるぞといったのです。ポーンは、これをきいて、くろくなるということとは、セメントが分解して変質でもするという意味か

と、聞きかえしました。私は、そうではない。黒ずんで見た目がわるいだけのことで、品質にはかわりないといったところ、ポーンは、それなら自分の使い途にはさしつかえないというので、近日はつきり注文すると約束をしてくれました」

「うん」

「つまり、これで判断すると、ポーンがこれからそのセメントをつかおうとする所は、塩気があるのです。——さきに申上げた第一で、地底か海底かのどっちかときまり、次の第二で、塩分が多いという条件が入れば、結局その答は、ポーンのやつ、海底でそのセメントをつかうのだということになるではありませんか」

「なるほど、なるほど。それでよく分った。たった二つの質問で

もって、そのような重大事実をつきとめたとは、最近モロ警部はなかなか凄腕になったものだ」

長官からしきりにほめちぎられて、警部モロは、少々はなの先がむずがゆくなった。

「ところで、そのおくを洞察することが、肝かん要ようだて」

アンドレ長官は、モロをほめるのはいい加減にして、急に方向転換した。

「えッ」

「セメントを海底へもって行って、一体何をするつもりかという問題じゃ」

「はあ、なるほど」

「なんだ、モロ警部。君が感心しては、こまるじゃないか。そのところが、事件の核心をつくものだとおもうが、君はまだその方をしらべきっていないのかね」

「はあ、まだですが……」

といったきり警部モロは、ぼうのように固くなった。なるほど、あのセメントを海底へもっていったって何をするつもりか。これはたいていへんな大問題である。

サイゴン近し

謎のポーニン氏から、極東セメント商会の外交員を装う警部モロのところへ電話がかかってきた。

当時モロは、店にいなかった。

でも、モロがいなくてもポーニンからの電話には、すぐ出てくれるようにとの言伝ことづつてが、官憲の名によつてきびしく命令されていたので、その電話は、すぐさま警部モロと声音のいた秘書課のラームという社員の机上電話につながれた。

「ラームさん」と商会の交換手がいった。

「例のフランス氏こと実はポーニン氏から、モロ警部さんあてにお電話よ。しっかりして、応対してくださいね」

「わーっ、とうとう来たか。よし、おちつくぞ。——つないでもいいぞ」

間もなく、くりっとおどがして、ポーニン氏の声はいってきた。

「ああ、もしもし。フランスですがね。あなたはこの間私のところへ来られた……」

「ああ、そうです、そうです。えッへん」

と、ラーム社員は、警部モロをまねて、わざとへんなせきばらいをした。

「ああ、わかりました」とポーニン氏は、へんなことに感心して、「ところで、例の話のことですがね、すぐお出でをねがいたい。」

場所はモンパリという料理店です。私の名をいっていただければ、すぐわかります」

「ははア、承知いたしました。す、すぐにうかがいますでござい
ます。えッへん」

といつて、受話器をおいたが、彼の額には、玉のようなあせが
行列をつくつていた。

「おいおい皆、きいてくれ。フランス氏がモロ警部に会いたいと
いうんだが、すぐ警部に電話で連絡をつけなきゃならない。一体
警部は、今どこにいつとるのか、知っているやつはいないか」

社員ラームは、まわりの同僚のかおを、ずっと見廻みまわした。

「ああ僕が知っているよ。さつき御当人から知らせがあつたよ。

料理店のモンパリにいたるといつてたよ」

「えつ、モンパリ、なんだ、同じ店じゃないか。あらためて出かけるまでもなく、モロ警部は、モンパリにいるのか。なんだかはなしがへんだね」

「すこしも、へんじやないよ。モロ警部は、実は昨日から、ずっとフランス氏のあとをつけてまわっているんだよ。今の電話も、当人のモロ警部が、机の下かなんかにはいこんだまま、お先へ聞いてしまったかもしれないよ」

「うむ、なんでもいいから、すぐモンパリへ連絡しなきや、あとで大へんなおしかりに会うぞ」

ラーム社員は、また電話器をとりあげて、料理店モンパリへの

連絡をたのんだ。

ところが、電話が話中で、なかなか相手が出て来ない。ラーム社員は、髪の毛をむしって、じれた。

丁度そのころ、このサイゴンの港から三十キロの海上を、問題のノーマ号と平靖号とが、おしどりのようにつながって、西に航行していた。もう夕刻に近かった。

「おいおい、竹！」

呼んだのは、船長ノルマンであった。

竹とよばれた水夫の竹見は、巨人のハルクと繫けいさく索の手入れをしているところであったが、うしろを向くと、そこに船長ノルマンが立っているのです、また例の皮肉な用事かと、舌うちをしなが

ら立ち上った。

「なにか御用ですかい。こんどは、トップスルまで、十五秒半でのぼって御覧に入れますかかい」

「だまって、わしについてこい。面白いものを見せる」

「面白いもの？」

どうせ、真直に面白いものではなからうが、そういわれると、見ないではいられない。水夫の竹見は、ハルクの方へ、それと眼くばせしてから、船長のうしろにしたがった。

「まあ、入れ」

「はあ。ここは船長室ですか」

「ふん、それがどうした」

「いやに綺麗ですね。へえ、今夜はなにか始まるんですか。これは小型映画の機械じゃないですか」

竹見は、卓上についている小型映画の映写機をさした。

「ははあ、おまえ、なかなかインテリだな」

「いえ、わしは活動の小屋で、ボーイをしていたことがあるんで」

「なんでもいい。面白いものを見せるといったのは、サイゴンに入港する前、お前にぜひ見せておきたいフィルムがあるんだ。今うつすから、まあそこで見ている」

「えっ。船長さん、おどかしっこなしですよ」

竹見が、椅子のうえにこしをおろすと、室内がぱつとくらくなつて、スクリーンに映画がうつりだした。海の映画だ。

「あつ、あの船は！」

竹見は、おもわず、大きなこえを出した。

おお平靖号^{へいせいごう}

「あつ、あの船は！」

と、竹見がさげんだのも道理であつた。スクリーンのうえに、とつぜん現れた汽船は、これぞ竹見が先に乗組んでいた仮装中国貨物船の平靖号であつたではないか。

そのとき、竹見の背後で、船長ノルマンの、ふふふと、うすわらいをするこえが聞えた。

「船長さん。いまうつっているのは平靖号だが、いつ撮影したんですか」

と竹見は、たずねた。

「まあ、しずかにして、もつと先を見ているがいい」

船長のこえは意地悪い調子をおびていた。

映写機はことごととおとをたて、フィルムをくりだす。竹見は、だんだん目を大きく見開いて、画面にすいつけられたようになっていく。

画面の平靖号は、かなり大きくうつっていた。船長が、ほとん

ど画面の全部をうずめているくらいの大きさだ。どうやら、これは倍率の大きい望遠レンズのついた器械でうつしたものらしい。

そのとき、竹見がふと気がついたのは、平靖号の船腹に、一隻のボートが、大きくゆれながら、繫けいりゆう留りゆうしていることだった。

そのボートには、不似合いな大きなはたが、はためいていた。

（おお、あれは軍艦旗のようだ！）

竹見は、どきんとした。いやなところを、船長ノルマンはうつしたものだ。これはどうやら、平靖号が、岸少尉の指揮する臨検隊を迎えたときの光景ではあるまいか。なぜノルマンは、こんなところを、映画にとつておいたのか、ふしぎでならない。

すると、画面は一変して、甲かんぱん板の大うつしとなった。また更

に倍率の大きいレンズを、つぎ足したものとみえる。

甲板に整列している乗組員は、いずれも見覚えのある同志ばかりだった。両脚のない虎船長が、船員にかかえられて甲板に姿をあらわした。すると、画面に岸少尉が出てきた。つかつかと虎船長のところへ寄ると、しつかと握手をして、つよくふつた。感激に虎船長の顔が歪ゆがんだようになるところまでが、いやにはつきり画面に出てきた。

画面は、それから下方に動いて、岸少尉一行がボートへ乗りうつるところがうつり、それから画面はまた甲板にもどつて、虎船長の感激のなみだにぬれた顔やら、幹部の万歳をとなえて手をあげるところや、はては水夫竹見のすがたまでがうつつたものであ

るから、竹見はもうびっくりしてしまった。

「ふふふふ、どうだ、この映画は、さぞ貴様の気に入ったろう」

「うむ——」

船長ノルマンの皮肉な台詞にたいして、竹見は目を白黒するより外なかった。なぜ船長ノルマンは、こんな映画をとったのであろう。そしてまた今、わざわざ竹見をよんで、強制的に見せたのである。これは油断がならないぞと思つた瞬間、竹見の腹の中は、熱湯が通つたようになつてあつくなつた。

「わしには、よく分らないが、平靖号を映画にとるなんて、フィルムの方が勿^{もつたい}体ないじゃないですか」

「ふふふ。相手は平靖号だから、こうして貴重なフィルムをつ

いやすだけの値打があるわけさ」

「ふん、ばかばかしい。きつい道楽というものですよ。とび魚のとんでいるところや、甲板を怒濤があらうところなどをとっておいた方が、よほど値打がありますよ」

「あはははは。そう狼^{ろうばい}狽^{ばい}しないでもいいじゃないか。この映画を見れば、平靖号の乗組員が、本当の中国人か、それとも偽せの中国人だか、よく分るのだ。これほど値打のある映画は、そうざらにあるものか」

そういって、船長ノルマンは、映写をとどめ、まどをあけて室内を明るくした。竹見は、ここでノルマンにとびつき、首をしめてやろうかとおもったが、むこうでも油断なく竹見の方に気をく

ばつていて、すぐにもピストルをつきつける用意のあるのが見え
た。

(もう、これは諦めるあきらしかない)

えい、竹見は嘆息たんそくした。たしかにこの映画をみると、一同が
日本人であることは、明白であつた。

「船長さん。わしにこんな映画を見せて、それでどうしようとい
うのですか」

竹見は、自分からお先に切り込んだ。

「ふふふ。貴様はなかなかはなせる男だぞ。そこでこつちのた
のみというのは、平靖号まで貴様に、使いにいつてもらいたいの
だ」

「なに、わしに平靖号へ、つかいにいけというのですかい」

憎むべき恫喝^{どうかつ}

船長ノルマンがとつぜんいいだした用件というのは、竹見に平靖号へつかいにいけという意外な用事だった。

「そうだ、平靖号へいって、船長に、こっちの用件をつたえてくれ。その用件というのは、平靖号はこれからサイゴンに入港し、貨物を全部売りはらうか下^{おろ}すかして、そしてあらためて新しい貨

物をつんで出航してもらいたいのだ」

「なんです、それは……」

竹見は、急にノルマンの言葉がのみこめないという風だった。平靖号の積荷を、そう勝手に下ろしたり、変えたり出来るわけのものではない。

「はやくいえば、サイゴン港において、平靖号をやといたいのだ」
「ああ、雇やといせん船となるのですか。そいつは駄目だ」

竹見は、首を左右に振った。平靖号には、特別の使命がある。それをノールウエーの汽船なんかの船長に雇われて、航海をつづけるなんて、そんなことは出来ない。

「やかましいやい」船長ノルマンは、地じがね金を出して、厳しい口調

で竹見をどなりつけた。

「貴様に平靖号をやとうから承知をしてくれなどといっているのじゃない。むこうの船長に、こっちの命令をつたえりや、それで貴様の役目はすむんだ」

「命令？　平靖号がそんな不法な命令を聞く必要がどこにあるものですか」

船長も竹見も、どっちもおおをこわばらせて、言いあつた。

「これは命令だ。このノルマンの命令なのだ。平靖号の船長が、それを聞かないといったら、こういつてくれ。『しからは、こっちは、お前の船が、中国人を装った日本人の乗組員でうごいてい

ることを、むこうの官憲に知らせてやる。こっちには、それを証

「抛だてる映画があるぞ」と、そういつてやるのだ。映画のことは、貴様に見せておいたから、どの位の値打のある映画だか、貴様から、よくはなしてやるんだ」

「それは脅きょうはく迫だ。恫喝だ」

「ふん、なんとでもいえ。わしは、一旦決心したことは、やりとおす主義だ。さあ、これからすぐ用意をしろ、本船は、間もなく平靖号に接近して、停船信号を出す」

竹見は、なにもいわなかった。いつても無駄であることが、よくわかったのだ。船長ノルマンは、おもったよりすごいやつであった。一目で、平靖号の秘密をさとり、そしてそれを利用するため、その重大光景を映画にとっておいて、今それをつかおうとす

るのだった。

竹見は、ノルマン船長の命令どおり、つかいにいくしかなかつた。

「仕方がない。じゃあ、平靖号へつかいにいくことにします」と、わるびれずにいった。

それを聞いた船長ノルマンは、大よろこびであつた。早速彼は電話器にかかつて、平靖号への接近を命令した。船は、すぐさま針路をかえ、そしてスピードを高めた。そしてヤードに新しくあげた信号旗をびらびらさせながら、平靖号の方へ近づいていった。竹見は、身軽にふなばたに立つて、近づく平靖号を、じつと見

お
下ろしていた。

船長ノルマン、なぜきゆうに、平靖号への使者を出して、雇船を申し出たのであろうか。

これより一時間ほど前、船長は秘密符号から成る電報をうけとつた。その電文によると、サイゴン港で、急に貨物船を雇う必要ができたから、海上において、至急、貨物船をさがしてくれ”といういみのことがしるされてあつた。発信人の名は、もちろん秘密符号でしるされてあつたが、それを解いてみると、ポーニンと出た。

ポーニン！

ポーニンといえば、フランス氏と仮りに名をかえ、サイゴンでしきりにセメントを買いこんでいるあの怪人物だつた。

汽船ノーマ号の船長ノルマンと、怪人ポーニンとは、こんど始
めての取引ではなかった。その間をあらえば、おどろくべき兩人
の深い関係があらわれてくるであろう。

それにしても、奇怪さを倍加したのは、ノルマン船長である。
ノールウエーの汽船が、ソ連の密使といわれるポーニンとの間に
相当ふかい連絡があるというのは、一たいどうしたことであろう
か。

水夫の竹見はおもいがけなく、ふたたび平靖号の甲板をふんだ。
同志たちは、いずれも竹見を歓迎してくれた。そして、彼が火
薬船だと知ったのは、どういうわけかなどと、質問をかけられた
が、竹見は、それにはこたえず、虎船長のもとへいそいだ。

虎船長は、それこそ猛虎が月にほえるような大きなこえを出して、ノルマンの無礼極まる命令を一蹴した。

奇妙な相談

竹見は、虎船長とノルマンとの間にはさまって、まったくこまってしまった。

「船長。ああいう場面を撮影されちまったんですから、サイゴンに入港するとたんに訴えられ、そこでそのまま拿捕されてしま

ますぞ」

「いや、われわれ日本人は、東洋水面において、他国人から威嚇いかくされる弱味は、なんにも持っていないんだ」

虎船長は、きつぱりとそういつて、ノルマンの申入れをしりぞけた。このことは、早速ヤード上の信号旗によって、船長ノルマンへ通じられた。

すると、折かえしノルマンから、返事がおくられてきた。

「例の映画を、平靖号の行くさきぎざきへ配布して、寄港を妨害するがよいか」

これに対して、平靖号からは、

「勝手にしろ、船長ノルマン」

と、やりかえした。そして虎船長は、ノーマ号の火薬に、何とかして火をつけて撃沈させる工夫はないものかと、思った。

すると、またもや、ノルマンからの信号がやってきた。

「では、已^やむを得ない。貴船は、あと五分ののち、撃沈されるであらう。嘘だと思ふなら、貴船の左舷前方の海面を、仔細^{しさい}に観察してみるがいい」

すこぶる気味のわるい警告であつた。虎船長は、すぐさまこのことをしらべるよう、命令した。

ところが、間もなく伝声管が鳴つて、船橋から、たいへんな報告がとどいた。

「船長。潜水艦がいます。ノーマ号から注意のあつたとおり、本

船の左舷前方、わずか五百メートルのところに、潜望鏡が見えま
す」

「なに、潜水艦が、本船を狙って五百メートルの近くに……。う
む、そうか」

虎船長は、身体をふるわせて、いきどおったが、どうすること
もできない。ノールウエーの汽船だというノーマ号が、潜水艦と
結んでいるなんて、へんなことだ。すると、ノーマ号はノールウ
エーの汽船ではないのかもしれない。

潜水艦の襲撃をうけて、ここで沈没したのでは、せつかくここ
まで出かけた平靖号の使命は、それこそ文字どおりの水の泡とな
ってきえてしまう。虎船長は、無念やる方なく、しばし黙考して

いたが、しばらくして、幹部を呼んで評定ひようじようを開いた。その結果、あらためてノーマ号に対して、信号を送ることとなった。

信号旗は、三度ヤードのうえに、するするとあがった。

「貴船の申入れを大たい諒承りようししようした。くわしい返事は、水夫竹見を通じて申入れるから、しばらくまたれよ」

事実上、平靖号は、まんまと船長ノルマンの毒牙どくがに、かかっってしまったわけだった。南シナ海方面で大いにあばれるつもりだった仮装中国汽船の平靖号も、ついにつまらない運命におちこんだ。そして水夫竹見は、虎船長の返事を持って、再びノーマ号へ、かえっていくことになった。

ここではなしは、サイゴンに飛ぶ。

怪人ポーニンは、フランス氏と仮称して、モンパリにおさまっていた。セメント会社の社員に化けている、警部モロは、ポーニンの室の前に現われ、とびらをたたいた。ポーニンがモロを呼びつけたのであった。用件は、多分例の安物のセメントの買いつけのことであらうとおもわれた。

「やあ、フランスさん。さつきはお電話を、ありがとうございまして。急なお呼びは、何の御用ですか」

と、警部モロは、商人らしい口のきき方をした。

すると、ポーニンは、いやににこにこ顔で、

「おいそがしいところをよびつけて、すみませんなあ。じつはおり入って、あなたに相談があるんです」

「はあ、セメントの値段を、もっとまけろとおっしゃるのですか」

「いや、その話は、べつです。後でしましょう」

「ははあ、セメントのはなしでないというと、はて、どんなこと
でしょうか」

警部モロは、ポーンが何をいい出すかと、非常に興味をおぼ
えた。

「いや、外でもないが、あなたに大金儲けをさせたいんです」

「大金儲け？　ほう、この私にですか」

「そうですとも、それには、あなたに、今つとめているセメント
会社をやめてもらって、その代り、私の所有船の船長になつても
らいたいのです」

「えっ、セメント会社の社員をやめて、船長になれというんですか」

「私のもうけの二割を、あなたに提供します。数十万フランにはなるでしょう」

「一体その船は、何という船ですか」

「私が買う以前は、平靖号という船名を持っていた中国の貨物船なんです」

勇士の途^{みち}

平靖号のうえでは、水夫竹見をノーマ号におくりかえして、船長ノルマンの申入れを承諾することに決していながら、なおも議論は、沸騰ふっとうした。

「ノーマ号に屈服するなんて、なにがなんでも、あまり情けないことです。船長、わが平靖号が日本を出発するときの、あの天をつくような意気は、どこへおとしましてしまったんですか」

「かりそめにも、ノールウエーの汽船のため、あごでつかわれるとは、日本男児のはじめです。あとのことはあとのこととして、サイゴンへ入らないうちにノーマ号の中へ斬りこんでは、どうでしょう」

「そうだ。それがいい。平靖号をノーマ号のそばへ持つていって、いきなりぶつつけるのもいいとおもう。竹見のはなしによると、むこうの船は、火薬船だということだから、こっちからぶつつけたとたんに、火薬が爆発して、船長ノルマンはじめ船もろともに、空中へふきあげられてしまうだろう。ねえ、船長。それをやってみようじゃないですか」

なにしろ血の気が多くて、祖国日本をとびだした連中のことだから、平靖号が、ここでノールウェー汽船の雇やといせん船になつておわるというのでは、躍る血潮の持つていきどころがない。だから一つの議論が、さらに二つの議論を生むという調子で、船長室の中は、われるようなさわぎとなつた。

虎船長は、若者たちの、熱血あふるる言葉を、じつと目をつぶつて、聞いていた。事務長その他、高級船員は、むしろ、若者の留めやくにまわつたのであるけれど、自分たちとても、もともと胸中にたぎる武ぶ俠精神ぎょうせいしんの所有者だつたから、あたまから、若者たちをしかりつけるわけにはいかない。もうこの上は、虎船長の裁断さいだんをまつよりほかに、手段はなかつた。このとき船長は、やつと両眼をぱつと開き、一座をずっと見まわすと、

「おう、聞け。さいぜんから、お前たちのしやべっていることは、わしのこの胸の中に、ちんちん煮えたっているものと、全く同じことじゃ」

そういつて、虎船長は大きな拳固げんこをかため、自分の幅広いむね

を、どんとたたいた。

「じゃあ、船長……」

「まあ、聞け」と虎船長は、制して、

「だが、われわれは匹夫ひつぷの勇をいましめなければならぬ」

「えつ、いまさら、匹夫の勇などは……」

若者連中は、匹夫の勇といわれて、おさまらない。

「まあ、しずかにしろ。——これが、わが平靖号の壮途そうとの最後に

近い時ならば、それは、だれかがいったように、こっちの船体を、ノーマ号の船体にぶっつけ、ともに天空へふきあげられてけむりになってしまうのも、わるくない。だが、かんがえてもみる。平靖号は、まだやつと祖国の領海をはなれたばかりのところじやな

いか。壮途にのぼりながら、まだ一回も、壮途らしいことをやったことがないのだ。おい、そうでないというやつは、いないだらう」

それは、そのとおりにちがいない。平靖号が航海にとびこんでからこつち、多少、風浪ふうろうともみ合ったり、横合よこあいから入って来た危難を切りぬけるのに、ほねをおったぐらいのことで、こつちから仕かける壮途らしいことは、ただの一回もやったことがないのだ。この虎船長のことには、だれも反対をとなえる者がいなかった。

それと見定みさだめたうえで、虎船長は、こえをはりあげていった。「なにごとも、自分のおもいどおりになるものじゃないのだ。全

力をつくしても、そこには運不運というやつが入ってくる。時に利のないときにも、かならず突破しなければならぬとおし出していくのは、猪武者いのしむしやだ、匹夫の勇だ。すすむを知って、しりぞくを知らないものは、真の勇士ではない」

「じゃあ、船長は、どうしろというのですかい」

若い船員は、虎船長の長談議にしびれを切らして、こえをかけた。

「だから、わしはお前たちに、かんがえなおせというのだ。あんな不利な映画まで撮ったノルマンという船長は、只者ただものではないぞ。汽船きせんだつて、ノールウエー汽船といっているが、そうじゃあない。ここは、こっちの負けだ。こっちに油断があつたのだから、

仕方がない。負けを負けと承知して、しばらく運とともにながれてみようじゃないか」

「運とながれるって、船長、どうしろというのですか」

「つまり、しばらくノルマンのいいなり放題になっていることさ」

「ううん、癩しやくだなあ」

「そうして様子をうかがっていれば、そのうちに、むこうにきつと、油断ができるにちがいない。そのときこそは、わしが号令をかけるから、そこでみな立って、日東健児の実力をみせてやるのだ。わしの好きな大石良雄はじめ赤穂四十七義士にも、時に利あらずして、雌しやく伏の時代があつたではないか」

サイゴン港

虎船長の説得が、功を奏して、さしもの平靖号の若者たちも、別人のように、しずかになった。

竹見水夫も、妙にはにかんだようなかおをして、ふたたびノーマ号への使者となつて、ボートにのつて出かけた。

船長ノルマンは、竹見の口上をきいて、わがことなれりと、大よろこびだ。

「うわっはっはっ。はじめから、あっさり、それを承知すればい

いのに。つまらんことで、いい加減、手数をかけやがった。さあ、おくれた船足をとりかえして、先へいそごうぜ」

「はい、はい。心得ました」

一等運転士は、操舵当番そうだへ、大ごえで進航命令を下した。それと同時に、平靖号へも、全速力で、ノーマ号の先登せんとうに立って、ドンナイ河の河口をさかのぼるようと、信号旗を出した。

目的地のサイゴン港は、ドンナイ河をさかのぼること六十キロのところにある。つまり、陸岸にはさまれた河のみなどで相当まがりくねっている。だから、港の中は、たいへんおだやかである。軍港はすしはなれたところにあるが、こつちの港には、大小おびただしい数の汽船が、安心し切ってぎっしりと舷と舷とをよせ

合つて、碇泊ていはくしている。

平靖号は、後から監視の目を光らせているノーマ号からの指令にしたがつて、なにごとにもさからわず、命令どおり忠実に港へ入つていった。連日みだし切れないむねを持ってあましていた平靖号の船員たちも、異色ある亜熱帯地方の風物が、兩岸のうえにながめられるようになって、すこしばかし、なぐさめられた。

「いよいよ、やつてきたぜ。あれみろ、妙なかつこうの寺院みたいなものが見えらあ」

「ふん、あれはノートル・ダムだろう。おれたち俘虜ふりよども一同そろつて、はやく武運をさずけたまえと、おいのりにいこうじやないか」

「やかましいやい。捕虜だなんて、おもしろくねえことを、いうもんじやない」

そのうちに、両船は相前後して、とうびよう投錨した。お互いに、す

ねにきずをもっていることとて、仏官憲の臨りんけん検を、極度に氣にした。だが、そこはどっちも、相当のしたたかものことだから、なんとかかんとかいつて、うまく仏官憲を丸めて、退船してもらった。狐と狸とで、同じ人間を化かしっこしたようなものだった。臨検官は、御丁寧にも二重に化かされていながら、なんにも氣がつかないというのだから、まことに御苦労さまな次第だった。

怪人ポーニンが、平靖号にのりこんできたのは、その夜よふけてのことだった。

ちようど

丁度虎船長は、明日積荷を売るについて、その準備に、帳簿と書類の間にうずもれて、きりきりまいの最中だった。そこへ、当直の二等運転士が、注進のため、船長室へとびこんできた。

「船長。いよいよ来ましたぜ。船長ノルマンが、七八人ひきつれて、船長に会いたいといってやってきました。竹見の奴も、いけしやあしやあと、案内に立っていやがるんです」

「なに、もうノルマン一行が来たか。おい、事務長。ここはいいから、お前がすぐいって、応接しろ」

そういつているところへ、ノルマン以下は、竹見を先に立てて、つかつかと、船長室へふみこんだ。

「おい、竹。どれが船長だ」

竹見は、唇をぎゅつとかんで、無念そうにノルマン船長の命令を、きいている。

「そこにすわっているのが、虎船長です。両脚がないんだから、椅子から下りて、気をつけをしろなどは、いわないようにねがいますよ」

「ふん、そうか。わしは、足のない船長に、用事をいいつけようとはおもわない。新しい船主のフランス氏も、同じことをいっていられるよ」

ポーニン氏は、眼をぎらぎら光らせながら、虎船長の、こしから下を、見ていたが、

「なるほど、これじゃあ、船長のやくめをやってもらうのは気の

どくだ。よろしい。この船は、貨物ぐるみ、一千五百フランで買うことにして、このロロー氏を、新たに船長に任ずる。よいかな、虎船長とやら」

よいもわるいもない。虎船長は、フラン紙幣をうけとって、その代り、船長の服と帽子とを、ロロー氏に手わたした。

「たしかに、引きうけました」

と、ロロー氏は、にこにこがおदैって、虎船長の手をにぎった。ロロー氏というのは、外でもない。警部モロの変名だった。

「ええ、船主のフランスさま。この船が、つんでいる雑貨は、どのくらいの利益で、売りはらえばいいですかなあ」

警部モロは、虎船長がまだ、しようちしたともいわないさきから、もう船長気取りで、船主となったポーンに、相談をかけた。

虎船長も、さすがに、ゆがんだかおで、この場の成なり行ゆきをじつと見おくつているばかりであった。だから、若い船員わかたちは、或る者は、紙のように白い顔となり、また或る者は朱しゅ盆ぼんのように、真赤な顔になっていた。一等運転士が、それをしきりに、止めて
いる。

フランス氏を名乗るポーニンは、にやりにやりと、あたりをながめまわし、

「いや、本船の積荷を売りはらうことは、いずれゆつくり、かんがえることにして、まず大いそぎで、この積荷を下ろしてもらいましょう」

「へえ、すぐというと、今夜にもとといういみですか」

「そうです。夜分の荷役は、なかなかむずかしいといつかもしれないが、やってやれないことはない。さあロー船長。はじめて船長になったあなたのでだめしだ。すぐはじめてください」

ポーニン氏は、平靖号の荷を下ろすのを、たいへんいそいでいる様子だ。

「下ろしただけで、いいのですか。そんならやりましようが、下ろしたあとで、船員たちの労をねぎらう意味で、酒をのませてやつてください」

と、新船長さんは、なかなかぬけ目がない。他人のふんどしで、相撲をとるのたぐいであつた。

「酒？ 酒はのませるが、もつと後のことだ」

ポーニンは、難なんしよく色しよくをしめした。

「もつと後とは、いつのことですか。酒なんてものは、はやい方がいいのだが……」

「それは、私がゆるしません。酒をのめば、仕事をする力がなくなる。ここはなんでも、私の命令どおり、まず雑貨をいそいで下

ろし、それに引きつづいて、セメントをいそいでつみこんだ上で、
酒しゅえん宴をゆるすことにしましょう」

「ははあ、セメントを、はやくつむことが必要なのですね。どうして、そんなにセメントをはやくつみこまなければならぬのですか」

警部モロらしい質問のもつていきかたであつた。

「それは、こつちに必要があるからだ。そうすれば、ロロー船長、あなたのもうけも、うんとふえる」

そうはいつたが、それは返事になつていないようであつた。

「私も、大金儲けはしたいですがね」と、警部モロは、わざとにやりと笑顔をつくり「だが、船長となつた以上は、船員の厚生福

利をかながえてやらねばなりませんでねえ。まるで牛馬か人造人間のよう、部下を使役することは、できません。もつともこれが船火事になったというような非常時なら、べつですがね」

船長ロロー役の警部モロは、
下したところ心があつて、なかなか怪人
ポーニンの意にしたがわない。

ポーニンとしては、ロローに金もはらつたことだし、今さら予定を変えることもできないので、だんだん船長ロローにひきずられていく形となった。

「うう、こまったやつだ」

と、ポーニンは首をふつて、

「おい船長。われわれは、いま事業のうえで、非常時に立ってい

るのだ」

「どうも、わかりませんね。雑貨をセメントにつみかえることが、なぜ非常時なんですか。私は船長として、部下にたいし、わけのわからないことに、無闇むやみに力を出せとは、命令しかねます」

「どうも、こまったやつだ」

と、さすがの怪人ポーニンも、ここでいらだたしさを、かくすことができなくなってしまうた。

「じゃあ、仕方がない。おい、船長ロー。君だけに、わけをはなそう。他の者は、ちよつと、この部屋から、出ていってくれ」といって、ポーニンは、虎船長をはじめ余人を、ことごとく去らしめ、そのうえで、なおもこえをひそめて、モロにいうには、

「君、こまるじゃないか。すこしは、こつちのむねの中を察して
くれなくちゃ。日ごろ、あたまのいい君にもにあ似合わないぜ」

「一体どうしたというんです。そのわけというのは」

「あべこべに、取調べをうけているようなかっこうだ。いやだね」
と、ポーニンは、あごへ手をやって、

「じつは、こうなんだ。私が今、うけおっている仕事というのは、
海の底に、潜水艦の根拠地をつくるという大仕事なんだ」

「ええつ、海のそこに、潜水艦の根拠地を？ 一たいそれは、ど
この国の計画なんですか」

身辺しんぺんの危険

怪人物ポーニンと警部モロとの間に、どんな程度のはなしがと
りかわされたかは、つまびらかでない。が、とにかく二人は、間
もなく平靖号の船長室から、至極仲がよさそうに、すがたをあら
わした。

もとの虎船長、つまり虎とらまつ松となにか無駄話をしていたらしい
ノーマ号の船長ノルマンは、これを見ると、立ち上って、

「どうしました。荷あげのはなしは？」

といった。ノルマン船長も、ポーニンには一目も二目もおいて

いるらしい様子だ。ポーニンは、にやりと、うす気みわるいわらいをもらし、

「ふふん、どうもこうもない。計画したことは、途中でどんな邪魔がはいると、かならずその計画どおりにやりとげるのが私の主義だ」

「すると、すぐ、この平靖号の荷役がはじまるというわけですな」
「もちろん、そのとおりだ。君の船からも、出せるだけの人数を出して手つだわせてもらおうかい。あの方の仕事は、一日でもはやくかからないと間に合わないからね」

「はい、わかりました。では、帰船して、力のあるやつを、できるだけたくさんかり出しましょう」

「うん、そうして呉^くれ、私も一しよに、君の船へいこう。ほかに、すこし相談したいこともあるから……」

怪人物ポーニンは、警部モロや、虎松以下の乗組員におくられ、船長ノルマンとともに、平靖号を退船した。

あとで、平靖号のうえでの、ひそひそばなし。

「なんだい、あの白人は。いやに、すごい目を光らせていたじゃないか」

「あいつが、この船を買って、セメントをつみこむんだとき。どうも、この平靖号もおかしなまわりになってきたのう」

「虎船長にもう一度いつて、今夜のうちに、サイゴンからずらかることにしちゃ、どうかな」

「そうもなるまい。ノルマンのやつは、どうやらこの土地でも、にらみが利く男らしいから、うっかりしたことはできない。まあ、虎船長のはなしじゃないが、こちららは時節をまつているんだね」

「どうも、いまましいあのノーマ号だ」

さだめし、ポーニンとノルマンは、小艇をノーマ号の方へ走らせながら、たびたびくさめを催したことであろう。

そのポーニンとノルマンは、小艇のうえで、ぴったりよりそつて、ぼそぼそと、秘密の会話をつづけている。

「とにかく、私の失策だ。どうも、すこし功をいそぎすぎたかっこ恰好だ」

そういったのは、ポーニンだった。

「どうもよくのみこめませんが、一体どういうわけで……」

「さあ、それだがねえ、ノルスキー」と、ポーニンは、船長ノルマンのことを、ノルスキーと呼んで、「ちよつと頭脳あたまがきくやつだとおもったから、これは金さえくれてやれば、うまくこつちの役に立つとかんがえたんだ。まさか、そのすじのものは、おもわなかつたよ。つまりあの船長ローは、そのすじのまわし者にちがいないということが、はつきりしたんだ」

「へえ、おどろきましたな。どうもまずいことになったものだ」
本名ノルスキーの船長ノルマンは、ちよつと、くさった様子であつた。

「船員に酒をのませろとかなんとか、いいがかりをつけて、その

じつ、こつちの仕事の様子をさぐるのが彼奴きやつの目的だった。さすがは商売だけあって、はじめのうちには、至極しごくすらすらと、私にしゃべらせおつた。近ごろにない私の大黒星だ」

二人の話していることは、警部モロの身の上みの上にちがいがなかった。モロの追つい窮きゆうがあまりにきびしかったので、ポーニンもようやくそれと、彼の素性すじように気がついたのであつた。

「このうえは、彼奴を、なんとかしなければなりませんね」
「そうだ、そのことだ」

とポーニンは、またさらに顔をノルマンの方に近づけ、
「さつきから、それをかんがえていたが、こういうことにしようとおもう。耳をかせ」

ポーニンは、船長ノルマンの耳に、なにごとかをささやいた。

すると、ノルマンは、急にはつと息をとめ、

「えつ、あおまだら青斑どくじやの毒蛇を……」

「これ、声が高い！」

ポーニンは、ノルマンの口に手をあてて、あたりへ気をくばった。

ざっそうえん
雑草園

サイゴンの港灣部や税関の方へは、うまくはなしをつけたものと見え、それから夜にかけて、平靖号の搭載貨物の大荷役が、たいへんなさわぎのうちに行われた。

ノーマ号の船員や水夫たちも、やむを得ず自船じせんに停らなければならぬ者のほかは、全部平靖号へ出かけ、荷役を手つだつた。

船と陸とには、おしげもなく灯火がてんぜられ、まるでみなどまつりの予行演習であるかのようにおもわれた。

荷役は、深しんこう更までつづいた。

竹見水夫も、あせみどろになつて、船と陸との間を何十回となぐ往復した。

巨人ハルクも、もちろん、労働の花形であつた。彼は陸上の倉

庫の方ではたらいていた。

警部モロは、ポーニンの口から重大な秘密をきいたので、これを何とかして、本部へ知らせたいものと、荷役の指揮をとりながら、しきりにじれていたが、船長ノルマンやポーニンのめが、いっかなそれをゆるさず、そのために、モロは、いくたびも、海へとびこみたくなつたほどである。

「どうですな、ロローさん。船長のやくわりというやつは、なかなか大したものでしょうがな」

ポーニンは、わざとモロのそばへすりよつて、そんな風にはなしかけた。

「なあに、大したことはありませんや。このあんばいじゃ、夜明

けまでにかたづくでしょう」

「いや、私はもつとはやいような気がする。もう下には、いくらも貨物がのこつていませんよ。すめば、あなたの申出があつたように、酒を出します」

「ああ、酒なんか、もうどっちでもいいです」

「いやいや、御遠慮はいらない。倉庫のところからすこしいつたところに、あなたも知つていらっしゃるでしょうが、雑草園という酒場がある。あそこへ酒の用意をさせましょう」

「えつ、雑草園ですか。もう、そこへ酒をたのんだのですか」

「いえ、これからのむところですよ」とポーニンはいったが「そうだ、あなた一つ雑草園へ行ってたのんでみてくれませんか。こ

つちの荷物は、もういくらもなさそうだから、あなたがいないで
もいいでしょう」

「そうですね、いつてみますかねえ」

と、警部モロはこたえたが、そのじつ彼は心の中で、たいへん
よろこんでいた。いよいよだれにも気づかれず、至極しごく自然に上陸
ができることになったのだ。

警部モロが、いそいそと舷げんそく側を下りて、小艇の中にすがたを
消したのを見すまして、平靖号の甲板かんばんのうえから、それを見お
くっていたポーニンとノルマンは、してやったりと、目を見合わ
せてにやりとわらった。

「うまくいきそうですね」

「ふむ、やつこさん、雑草園へいけば、きつとガーデンの卓子テーブルの前にこしかけて、一ぱいやりたくなるにきまつている。そのとき、なんとかいった大きな男が出ていって、うしろから知れないように、うまくやるだろう」

「ああ、あれは巨人ハルクです。あおまだら青斑どくじゃの毒蛇は、ハルクにわたしておきました」

「ハルクか。そのハルクは、きつとうまくやるだろうね。毒蛇を仕こんでおいたステッキの蓋ふたの明け方を、彼はよくおぼえただろうね。あれは、知らない者がやっても、決して明かないように、複雑な機構にしてあるんだ」

「あの明け方は、一度や二度きいたのでは、おぼえきれませんよ。」

ですから、私は、あらかじ予め蓋をもうすぐ明くというところまで外して、ゆるめておきました」

と、船長ノルマンは、したりがおにいった。毒蛇は、仕掛のあるステツキの中に入れてあるらしい。一体、その毒蛇を、どのようにつかうのであろうか。

「それは危険だ！」

と、ポーニンが、まゆをつりあげていった。

「それは危険だ。もし、ステツキの蓋が外れて、毒蛇がはい出す。そして、ハルクにかみつくと、ハルクが死んでしまう。すると肝か腎んじんの船長ローをかたづけける計画が、だめになってしまう」

船長ノルマンは、しばらくだまっていたが、

「そんなに心配なら、私も上陸しましょう。そして、もしハルクが、やりそんじたら、こいつでかたづけてしましましょう」

と、胸のポケットの上をたたいた。そのポケットの中には、彼ら一派が愛用している万年筆の形をした消音小型ピストルが入っていた。

「それをこんなことにつかうのは、感心しないぞ」とポーニンは、くびをふった。「弾痕だんこんや弾丸から、われわれが何処の国籍の間か、すぐ判断されてしまう」

「じゃ、彼奴きやつのうしろへまわってくびをしめましょう。そしてだれにも気づかれぬうちに死骸しがいをうまくかくしてしましましょう。われわれの出帆までに発見されなければいいでしょうから」

警部モロの身の上について、おそるべき相談が、怪人物ポーニ
ンと、船長ノルマンとの間に出来た。

荒療治あらしようじ

なにも知らない警部モロは、上陸すると、すぐその足で、酒場さかば
雑草園へいった。それは、まず忠実にいつけられた用事をはた
し、ほかからうたがいの眼をむけられないためであった。まさか
彼は、そのような細心の注意が、もはや無駄だとは知らなかつた。

警部モロは、ビールがすきであつた。

だから彼は、その夜の饗宴きようえんのことをすっかりたのんでしまつた後で、ボーイに、ビールを所望した。

「じゃあ、旦那さん。あつちに、すずしいしずかな席がございませから……」

と、ボーイは、警部モロを、この酒場の名のとりの雑草園の方へ案内し、そこにところどころに置いてある野外席の卓子へみちびいた。

むしあつい夜だったので、そよ風吹くその卓子は、警部モロを悦よろこばせた。そして彼は、ここ暫くつづいた敵中の緊張を、一時ほぐすために、ビールの大コップをとりあげたのだった。それは、

実にすばらしいビールのあじだった。モロは、生れてはじめて、ビールがこんなうまいものかと、おどろいた。そうであろう、そのビールこそ、彼の末期まつごの水であつたのだから。

雑草園のものかげに、巨人ハルクは、原地人のふくを着て身をしのばせていたが、船長ノルマンからいつつけられたとおり、モロの卓子に、当のモロの外、誰もいなくなつたのを見すまし、例のステツキを持って、のこのこ出ていった。

「もし旦那さん。ステツキをおとどけ申します」

警部モロは、もうすこしあかいかおになつていたが、

「ステツキ？ 一体そりや何事だ」

と、こわい眼で、ハルクを見た。

「さあ。わしはなんにも知りませんが、今雑草園へ入っていった旦那に、このステツキをわたしてくれと、たのまれましたのです」
「ふーん、それをたのんだのは何者か」

「さあ、わしの知らない人ですが、どうやらそのすじの人らしい……」

「よし、わかった。もう後をいうな。ステツキをこつちへよこせ」
ハルクは、フランス語をすこししゃべる。それをノルマンが利用して、この芝居をやらせているわけだった。

ハルクとしては、めいわくこのうえもないが、まさか相手が、土地の警部であり、そしてハルク自身が今殺人に取り懸っているなどとは知らない。一方、警部モロはモロで、ハルクのことを本

部からの連絡密使であると、かんちがいをしてしまった。

黒いステツキのあたまが、モロの方へさしだされた。ハルクは、そのステツキの根元ねもとをもつて、さしだしたのであるが、それもノルマンからいわれたとおりにした。すると、彼の手は、鉦ポタンをおさえたことになる。とたんに、ステツキの蓋が、ぱちりとあいた。その瞬間ステツキがにゅつと伸びたように見えた。

「あつ、あツツ！」

それが警部モロの最後のこえだった。ステツキの中にひそんでいた青斑あおまだらの毒蛇どくじゃが、蓋が明いたとたんに、警部モロのゆびさきに咬かみついたのである。

モロは、面めん色しよく土のごとくになり、発条仕掛バネじかけの人形のように、

突立ちあがり、椅子をたおした。彼の左手が、ぶるぶる震えるなわのようなものを、右手からひきちぎった。そしてハルクめがけて、ぱつと投げつけた。それは青斑の毒蛇だった。

「あつ！」

ハルクは、ふって湧いた意外な事件にすこしぼんやりしていたところだった。とびついて来るものが蛇だと知ったとき、ハルクは、拳こぶしをかためて、ぴしりと蛇を払いのけた。蛇は足元におちて、がさがさと音をたてた。

「こいつ奴め！」

ハルクは、それがまさかおそるべき毒蛇だとまでは気づかず、こんどは、足をあげて、うむと、蛇をふみつけた。

「おう、うまくいった。ハルク、その先生をこっちへ抱いてこい」
突然ハルクに呼びかけたのは、船長ノルマンだった。

「あつ、船長」

「余計な口をきくな。はやくやれ、はやく。その先生をかかえて、こっちへ来い」

警部モロは、酒をのんでいたところへ、毒蛇に咬まれたので、たちまち毒が全身にまわって一命をおとってしまったのである。

ノルマンは、ハルクに手つだわせ、彼が怪訝けげんなかおをしているのをしかりつけながら、警部モロの死骸を、下水管の中へ放りこんで、しまつをしてしまった。

「まず、これでいい」

「船長、ひどいことをするじゃないか。わしには何にもいわないで……」

「れいをする。だから喋るな^{しゃべ}」

「毒蛇をわしにあずけておいて、用心しろ、咬まれるとお前の生命があやういぞともいつてくれなかつたのは、いくらなんでも……」

といつているうちに、どうしたわけか、ハルクは、急にあわてだした。

蛇毒^{じやどく}は廻る

「船長、ま、まってくださいえ」

ハルクは、くるしそうにあえぎながら、ふりしぼるようなこえでいった。

「なんだ、ハルク」

と、船長ノルマンは、うしろをふりかえったが、ハルクは、やけつくようないきをはつはつと、はいている。

「おや、お前どうした、ハルク」

「あ、いけねえ……」

「なに、いけない。なにが、いけないというのか」

船長ノルマンが、懐中電灯をてらして、ハルクにさしつけたときには彼は、くちびるを紫色にし、死人のようなかおをしていた。「うむ、さては」

「船長。あの蛇は、毒蛇だったんだな」

ハルクは、ぎりぎりと歯をかみあわせた。

船長ノルマンは、無言だ。おもいがけないことになって、彼は善後処置をかんがえているらしい。

「おれは知らなかった。あの男を殺す役目をいつかっていたとは知らなかったんだ。だが、そのぼつがあたつたんだ、おれは、毒蛇に足を咬まれてしまった。ああ、あいた……」

巨人ハルクは、どきつと、地上にうちたおれた。

「こら、ハルク。しっかりしろ。お前が、どじをふんだもんだから、だれをうらむこともないぞ」

「なにを、船長ノルマン。お前は、ず太いが、卑怯者だ。ひきょうものなぜ、正直者のおれに人ごろしをさせた。しかもおれには、わけもなんにも知らせないで……。おれをペテンにかけやがった。正直者のおれを……」

巨人ハルクは、傷口の上を両手でけんめいにおさえて、うらみのことばをノルマンになげつけた。

そのとき、雑草園の本館の方から、がやがやと、人のさわぐこえが、きこえてきた。

船長ノルマンは、ここで人に見つかってはあとが面倒だとおも

つたので、ハルクのかたを叩き、

「おい、ここじや、具合がわるい。かたをかしてやるから、つかまれ。あつちで、医者みに診せてやるから」

「うーん、いたい」

ハルクは、口で、自分のシャツを、ペリペリと引き破やぶつた。それから、片手をつかつて、ギリギリと巻き、それで右脚を、ふくら脛はぎのうえで、かたく縛はつた。その間も、彼はたえず、獣のようになつたり、はあはあと、あらいいきをはいたりした。

雑草園の中は、ますますさわがしくなつた。ノルマンたちのこゝとに気がついたのか、それとも酔よっぱらいがさわいでいるのか、はつきりしなかつたが、とにかく、はやくむこうへいかないと、

とがめられる恐れがあつた。

「さあ、しつかりつかまれ」

船長は、そういつて、ハルクにかたをかした。そしてかけるように、そくほ速歩で歩きだした。

「うっ、くるしい。もつと、しずかに……」

「ちえつ、なんだ、ふだんは巨人ハルクといわれていばっている
あらくれ男のくせに。これくらいのことねで音をあげるたあ、死しに
損ぞこないの女の子みたいじゃないか」

「ま、まっ……」

「しつかりしろ。ぐずぐずしてりや、二人ともつかまっちゃう」

船長ノルマンは、有名な強ごうりき力だったから、巨人ハルクのうで

をかたにかけ、彼の巨体を、ひきずるようにして、どンドン埠頭ふとうの方へいそいだ。

やがて二人が近よつたのはぷーんと異様な臭氣のただよつてい
る倉庫だつた。その倉庫の入口は明いて、しきりに物をはこびこ
んでいる。そこはつまり、平靖号の積荷をはこびこんでいる例の
倉庫だつたのである。

「あつ、船長」

ノーマ号の火夫かふの一人が、目ざとく、二人をみつけた。

「おう、だれにもいうな。こいつ、意気地いけじがないから、やられち
まったんだ。おくへ入るから、だれにもだまつているんだぞ、い
いか」

「へい、へい」

火夫は、ぺこぺこあたまをさげた。彼も、船長ノルマンのおそろしいことは、知りすぎるほど知っていた。ノルマンは、肩にしていたハルクを、倉庫の一等おくまつたすみへ、たわらでもなげつけるように、ころがした。

「ううツ……」

といったきり、ハルクは、死人のようにぶつたおれ、そのままうごかない。

船長は、足をあげて、ハルクのかたをけつた。ハルクは、上むきになった。ひどい形ぎようそう相であつた。

「ふん、此奴こいつは、もうだめらしい」

鬼船長

そこへ飛びこんできたのは、竹見水夫だった。

彼は、船長ノルマンの姿をみるや、

「ハルクが、やられちまったそうですね。何処にいますか、ハルクは？ 一たい、どの野郎と喧嘩をしたんですか」

と、あたりをきよるきよるとうかがう。ノルマンは、無言で、竹見の間に、通とおせんぼうをして立つ。

そのとき、ハルクが、一声うなった。

「あつ、ハルク。お前、どこにいるんだい」

竹見は、ようやくハルクが、貨物のかげにたおれているのがついたようであつた。彼が、ノルマンの間をすりぬけて、後へとびこもうとすると、奇怪にも、ノルマンは竹見の肩を力まかせに、どんとつきとばした。

「あつ、……」

竹見は、不意を食つて、その場によろよろ、しりもちをついた。船長、な、なにをするツ」

竹見は、あわててとび起きると、すさまじい形相で、みがまえた。

「さわぐな。お前には関係のないことだ。むこうへいけ——」

「いやだ、仲間のくるしんでいるのを知って、放っておけるものですか」

「なに、反抗するか。竹、船長の命令だ。おもてへいって、お前は仕事をつづけろ」

「いくら命令でも……」

「うるさい野郎だ。じゃあ、早いところ、はなしをつけるぞ。これでも、おれの命令にしたがわぬというか」

船長ノルマンの手には、きらりとピストルが光った。

「やつ」竹見は、いきを、はつととめた。「それほど——いや、向うへいきますよ」

手元へ飛びこんで組打くみうちとも考えたが、船長と格闘することよりも、自分に親切にしてくれたハルクの安否あんぴをはやく見てやりたいとおもったので、齒をくいしばって我慢した。そして倉庫の出口へ出ていった。

船長ノルマンは、ぴゅーと、唾をはくと、やはりハルクのことが気になると見え、彼の様子をのぞきにいった。

「あつ、船長。手をかしてくれ」

ハルクは、こえをふりしばってさげぶ。

「なんだ、ハルク」

「ここんところを……」といって、ハルクはひざがしらをさし、

「ここんところを、船長の力一ぱいにしばってくれ。毒が……毒

が……」

さつき彼のふくらはぎのところを自分で縛しばったが、それがゆるんで、蛇毒じやどくが上へまわるのをおそれてのたのみだったらしい。

だが船長ノルマンは、ぬツと立ったまま、あわい電灯の光の下に、冷やかにハルクを見み下おろすばかりだった。

「船長。は、はやく……」

「おい、ハルク」

「ええツ」

「くたばるものなら、はやくくたばってしまえ」

「な、なんと……」

「そうじゃないか。お前の不注意で、蛇にかまれたんだ。そのお

かげで、おれにまで、つまらない心配と、無駄な時間とをついやさせやがった。お前がはやく死んで呉れれば、おれはたすかるのだ。おればかりではない、全乗組員も、ポーニン委員も、皆たすかるんだ」

「ううーッ」

「お前も、そのくらいのことは、察しがつくだろうがな。お前を医者にかけてみる。お前が雑草園で、なにをしたかということが、すぐ世間へばれてしまうじゃないか。ノーマ号と平靖号とが、特別の積荷をそろえて、無事このサイゴン港を出航できるまでは、お前のその身体は、だれにも見せたかないんだ」

「うう、この悪魔め！」

「こういうわけだと、そのわけを聞かせてやるのも、あの世へたび立つお前への手土産のつもりだ。もつとも、医者にみせたつて、この有様じゃ、所詮しよせんたすかる見こみはないにきまつていらあ」

「ち、畜生！ お、おれは死なないぞ！」

「これ、しずかにしろ」

「お、おれの死ぬときや、き、貴様たちも、地獄へ引ひっぱつていくんだ。は、うん、くるしい」

「まだ、喋しゃべるか」

「だれが、き、貴様たちの計画どおりに——」

「だまれ！」

鬼のような船長ノルマンは、足をあげて、ハルクの顔を、下か

らうんと力まかせに蹴^け上げた。

ハルクの顔からは、たらたらと赤い血がながれだした。

二度目に蹴上げたとき、ハルクは、うんとうなつて、その場に悶^{もんぜつ}絶してしまった。

彼等の秘密計画がばれるのを、ひどくおそれているからのこの暴行ではあったが、それにしても、面倒を見てやらなければならぬ部下にたいして、このひどい仕打は、船長ノルマン——いやノルスキーの脈管にながれている残虐性のあらわれであるとおもえた。

友情

船長ノルマンは、ハルクが、気をうしなつてしずかになつたのを見すますと、倉庫の出入口へ現れた。

「おい、この倉庫は、閉めるから、出る者は今のうちに皆出てこい」

倉庫の中は、もうほとんど一杯だったので、皆は、他の倉庫へ、陸揚の貨物をはこんでいた。残っていたのは、後片附けと見張りのノーマ号の船員数名だけだった。

船長ノルマンは、倉庫の入口を自らみずかびたりととじると、大きな

錠じょうをかけた。その錠は、彼のポケットへ――。

「なにを、ぼんやりしとる。ぐずぐずしていると、もうすぐ夜明けになるじゃないか。はやくむこうへ行って、手伝え」

ノルマンに、口くちぎたな汚なくしかられて、船員たちはあわてて、別の倉庫の方へかけ出していった。

瀕死ひんしのハルクは、ただ一人、とうとうこの倉庫のおくに、とじこめられてしまった。まったく同情あたいに値あすることだった。このうちは、サイゴン警視庁の活動をまつよりほかないが、まだむこうでは、モロ警部の遭難さえ気がつかない様子だ。

それから、小一時間ほどたつてから後のことだった。巨人ハルクのと同じこめられた倉庫の、通風窓つうふうまどにはめられてあつた鉄格てつごう

子が、きいきいとおとをたてはじめた。

きいきいという音は、しばらくすると、ぱたりと止み、それからまたしばらくすると、きいきいと高いおとを立てはじめる。窓からは、セメントが、ばらばらと下へおちる。誰か、通風窓の鉄格子を、ひき切っている者があるのだった。

二十分ばかりたつと、その通風窓から、ぬつと、一つの顔が現れた。

「おい、ハルク」

あたりを忍ぶしのようなこえで、倉庫の中へよびかけたが、返事はなかった。

「どうしたのかな。もう一本切れれば、なんとか入れるだろう」

ふたたび、きいきいと鉄格子をひき切る音がはじまった。どこから持つてきたか、こうそくどこう高速鋼のはまった鋸のこぎりを、一生けんめいにつかっているのは、外ならぬ水夫の竹見だった。彼は、ハルクの身の上をあんじて、この無理な仕事をつづけているのだった。

やがて竹見は、ついに目的を達して、通風窓から、倉庫の中に入らずに、入った。

「おい、ハルク。どこにいる」

竹見は、マッチをすって、あたりを探しまわった。

「あ、こんなところに……」

とうとうハルクの倒れている隅っこを見つけた。

ハルクは、虫の息いきだった。体は、火のようにあつい。竹見は、

おどろいて、空あき瓶びんの中に入れて持ってきた水で、彼のくちびるをうるおしてやった。

ハルクは、やっと気がついたようであつた。

「お、おのれ！」

「おい、ハルク、おれだ、竹だ。お前の仲よしの竹だよ、ほら、よく見ろ」

竹見は、マッチをすつて、自分の顔を照てらした。だがハルクは、目を開かなかつた。まぶたをあける力もないのであろう。でも竹見のこえはわかつたと見え、かすかにうなずき、

「うん、た、竹か。よ、よく……」

よく来てくれた——といたいのであろう。

「一体どうしたのだ。ハルク。おや、脚をしばったり……。おお。脚が紫色に腫れあがっているぞ」

「へ、蛇だ。ど、毒蛇だ……」

「なに、毒蛇にやられたのか、そいつは災難だなあ」

「いや、ノルマン……」

といいかけて、ハルクは、苦しきのあまり、また昏倒してしまつた。

竹見は、おどろいた。何もかも、一ぺんにやりたくて、焦れつたかつた。

彼は、ノーマ号へ乗り込んだときからの、この親切な巨人のため、おんがえしのいみで、できるだけのことをした。傷口を、持

つて来た洋酒で洗ったり、新たに膝のうえで縛り直したり、それからハルクの口を割って気つけ薬を入れてやったりした。

その手篤い看護が効を奏したのか、それとも竹見の友情が天に通じたのか、ハルクはすこし元氣を取り戻したようであった。

「た、竹。おれは、うれしいぞ。おれは、まだ死にはしない」

「うん、死ぬものか」

と、竹見は口ではいったものの、この重症のハルクが再起できるとは、ひいき目にもおもわれなかった。

「おい、た、竹。おれのズボンのポケットから、水兵ナイフを

出して……刃を起せ！」

「水兵ナイフ！ 危いじゃないか」

「いや、は、はやくしろ。そして、おれの手ににぎらせてくれ」

つ
の
る
蛇じやどく
毒

蛇毒にやられて、かびくさい倉庫の床に、氣息きそくえんえん奄々えんえんのハルクほど、みじめな者はなかった。常日ごろ、〃巨人〃という名をあ
たえられて畏敬いけいされていた彼だけに、今の有様は、なみだなしで
は見られなかった。

「おい、竹。どうした、水兵ジャックナイフは……」

と、巨人ハルクは、はあはあ喘あえきながら、水夫竹見に、さいそくをした。

「うん、水兵ナイフは、あつたが、これをお前がにぎって、どうするつもりかね」

竹見は、ハルクにいわれたとおり、ズボンのポケットから水兵ナイフを出して、刃はを起してやったものの、このときすまされた水兵ナイフを、重態のハルクににぎらせていいものかどうかについて、竹見は迷った。

「はやく、は、はやく、こっちへ呉れ。な、なにをぐずぐずしている……」

「はやく渡せといっても、お前、これをにぎってどうするつもり

か」

ハルクは、くるしさのあまり、このナイフでわれとわが咽喉のどをかききつて、自殺するのではなからうか、そう思った竹見は、友にナイフを手わたすことを、ためらった。

「ええい、こつちへよこせ！」

とつぜんハルクは、半身はんしんをおこすと、竹見の手から、ナイフをうばった。が、ナイフをうばったというだけのことだ。そのまま、また土間どまにかおを伏せて、うんうんと、高くうなりだした。

「ほら、そんな無理をするから、余計にくるしくなるじゃないか。おい、ハルク、おれが、これから出かけて、医者をさがして、呼んできてやる」

「い、医者なんか、だめだ。お、おれは、自分で、やるんだ」

と、いったかと思うと、ハルクは、とつぜん、むくむくと起きあがった。

「おい、どうするんだ」

ハルクは、無言で、いきなり、ベリベリと音をさせて、右脚の入っているズボンを、ひきさいた。

「竹、おれのバンドをといて、右脚のつけ根を、お、思い切り、ぎゅっと縛ってくれ。早く、早くたのむ」

ハルクは、歯をくいしばりつつ、自分の右の太ももを指した。

「あ、そうか、もつと上を、しばるんだな」

竹は、ようやく合点がたって、ハルクがいったとおり、バンド

をといて、太ももを、力のかぎり、ぎゅつとしめた。蛇毒は、ハルクのふくらはぎのむすび目をこえて、上へのぼってきたらしい。

「もっと強く、しばれ」

「でも、これ以上やると、皮がやぶけるぞ」

「皮ぐらい、やぶけてもいいんだ。なんだ、お前の力は、それっばかりか」

「なにを。うーん」

竹見は、全身の力を腕にあつめて、ハルクの太ももをしばった。
「うーむ」

さすがのハルクも、竹見が力一杯にしめつけたので、気が遠くなるような痛みに、うなった。

「これでいいか」

「うん、よし」

と、ハルクはうなずいて、

「竹、お前、向うへいっておれ」

「なんだと、——」

「お前がいると邪魔だ。向うへいっておれ」

「なにをするつもりだ」

「ええい、うるさい野郎だ。見ていてこしをぬかすな。これが、

おれのさいごの力一杯なんだ！」

「えっ」

ハルクの手に、ぴかりとナイフの刃がひかった。と、思うと、

懸^かげ声^{ごえ}もろとも、ハルクはナイフを自分の太ももに、ぐさりとき刺した。

「おい、ハルク」

「だまっておれ！ くそツ」

ハルクの硬いひじが、いきなり竹見の顎^{あご}を、下からつきあげた。竹見は、うーんと一声呻^{うな}つて、ふかくにも、その場にどうと倒れて、気をうしなつてしまった。

ほど経^へて、竹見が、再び意識をとりもどして、その場にむつきり起きあがったとき、彼は、ハルクが、ついに自ら、片脚を見事に切断しているのを発見して、愕^{おどろ}きもしたし、また感歎もした。

ハルクは、血の海の中に、うつ伏せとなり、水兵ナイフをそこ

へ放りだしたまま、虫の息となっていた。おそるべき大力だった。おどろくべき気力であった。何をどうしたのか詳つまびらかではないが、蛇毒をうけて瀕死ひんしのハルクは、ついに自らの手で、自分の太ももを切断することに成功したのだ。

竹見ほどの豪胆ごうたんもの者も、この場の光景を見たときに、なにかしら、じーんと頭のしんにひびいた。

死しりよく力

ハルクの呼吸は、発動機船のように、はやい。

「おい、ハルク。しつかりしろ」

竹見が、いくど声をかけても、ハルクはもう、一語も返事をしなかつた。

ハルクを抱きおこして、その口にブランデーを注ぎこんでやろうとしたが、ハルクは齒をくいしばって、口をひらかなかつた。

彼の顔面は、紙のように蒼そうはく白はくになっていた。

「おい、ハルク。死ぬな。死んじや、いけないぞ。おれは、医者
をさがして、ここへ引張ってくる。それまでは……」

水夫竹見は、そこで声が出なくなつた。そでで両眼をぎゅつと
こすりあげ、

「それまでは、死んじやならないぞ。気をしつかり持っているんだ！」

竹見は、この世の中に、ハルクが、一等彼の愛する人間であるように思われてきた。なんとかして、ハルクを助けてやらなければならぬ。

彼は、立ち上った。

(このまま、ハルクをここに残しておいて、大丈夫かしらん?)

おも 想いは、ハルクの一つのすういき、一つのはくいきにかかつて、心配は限りない。だが、このままぐずぐずしていれば、結局ハルクは、死との距離をだんだんつめていくばかりであろう。なんにしても、早く医者をごこへ引張つてきて、げどく 解毒の注射をうつても

らうとかして、正しい手当をうけさせねば駄目である。

竹見は、ついに最後の決心をして、

「ハルク、頑張っているんだぞ」

と、彼の耳許に叫ぶや、破ったまどをよじのぼり、外に出た。

が、彼は、うしろがみをひかれる想いであつた。

(なぜ、おれは、こうして、急に気がよわくなつたんであろう?)

竹見は、自分の心をしかりつけた。しかし彼は、ハルクのそばをはなれていくのが、いやでいやで仕方がなかつた。

それも、無理からぬことであつた。後に、そのときのこと、思いあわされたように、竹見にとっては、これが良き仲間ハルクとの永遠のお別れであつたのだ。いくたびか、悪船長ノルマンの

暴力から、竹見を救い出してくれた巨人ハルク！ 身体の大きいに似合わず、母親のように、親切にしてくれたハルク！ そのハルクとは、このとき限り、再び手をにぎる機会を逸してしまった竹見であつた。

こっちは、船長ノルマンであつた。

ノルマンは、さんざ、巨人ハルクを、利用するだけ利用したうえ、ハルクが毒蛇のためにかまれて、もう再起する力がないと見るや、れいこくにも、ハルクを倉庫の中にしてしまった。

彼は、倉庫の鍵をもっていたから安心してきつていた。まさか、あの倉庫の通風窓つうふうまどが破られることなどは、勘定に入れておかなかつた。だから、鍵を自分のポケットにしつかりにぎっているか

ぎり、誰もハルクの傍に行くことはできないものと信じていた。
（いずれ、あとでもう一度いつてみよう。ハルクは、たぶん息をひきとっているだろうから、そうしたら、後に面倒のおこらないために、倉庫の中に穴をほって、ハルクの死体をうずめてしまおう）

船長ノルマンは、自分たちに都合のよいことばかりかんがえ、そして万事ばんじて手ぬかりのないように、先の段だんどり取を、心のうちに決めたのであった。そこで彼は、モロ殺しのことも、ハルクを捨てたことも、知らん顔をして、悠々ゆうゆうと火薬船ノーマ号へもどつてきたのであった。

船では、怪人ポーンが、彼のかえりを、今か今かと待ちかね

ていた。

「おお、ノルマン。遅かったじゃないか」

船長ノルマンが、部屋に姿をあらわすと、ポーニンは、手にしていたハイボールの盃さかずきを下において、つかつかと入口へ、ノルマンを迎えに出た。

「どうも、骨をおりましたよ」

そういつて、ノルマンは、ポーニンが、もつとなにか云い出し、そうなのを手でせいして、入口のとびらを、ぴったりとじた。

「おい、結果を早く聞こう。あれは、どうした。そのすじの密偵いぬを片づけることは？」

「あははは、もう安心してもらいましょう。あいつは二度と、こ

の船へはやって来ませんぜ。万事すじがきどおり、うまくいきました。蛇毒じゃどくで昏倒こんとうするところを引かかえて、あの雑草園の下水管の中へ叩きこんできました。死骸は、やがて海へ流れていくことでしょうが、それは永い月日が経つてのちのことで、そのときは、顔もなにもかわっているし、この船も、このサイゴン港にはいないというわけです」

「そうか。それはよかった。ハルクには、特別賞をやらにやなるまい」

「そのハルクも、序ついでに片づけておきましたよ。万事片づいてしまいました。あとは、一意、われわれの計画の実行にとりかかるだけです」

怪しき男

そういつているとき、部屋の扉を、とんとんとたたいた者があつた。

ポーニンとノルマンは、顔を見合わせた。

「誰だ」

と、ノルマンが声をかけると、

「はい、私で……」

と、はいつて来たのは、事務長だった。

「なに用だ、事務長」

「なんだか、へんなやつが、船へやってきましたよ。ロロー船長がこつちに来ていないでしょうか、と、たずねているのです」

「なに、ロロー船長？」

ロロー船長というのは、警部モロのことだった。彼のことなら、もうとくのむかしに、この世から息を引取っているのだった。船長ノルマンは、ポーニンと顔を見合わせて、意味深長な目くばせしんちようを交わした。

「船長ロローは、上陸したが、なにか用事があつて、まだ帰つてこない——と、そういえ」

「はい」

「それから、なにか用なら、聞いといてやるからと、そういつてみろ」

「はい、かしこまりました」

事務長は、出ていった。

船長ノルマンは、ポーニンの方に、身体をすりよせ、

「ごらんなさい。さつそく警備庁の連絡係が、ロローのところへのりこんできたんですよ」

「ふん、あの一件を嗅ぎつけたんだらうか。それとも、平靖号の乗組員が、こつちを裏切つて、密告したんだらうか」

「さあ、どつちですかね。ねえ、ポーニンさん、ともかくも、そ

のすじの奴等に雑草園をしらべられると困りますから、それを胡ご麻ま化かするため、例の骨折賃ほねおりちんの饗きよう宴えんを、すぐさま雑草園で始めてはどうでしょう。わいわい酒をのんでさわいでいりや、なにがなんだか、わかりませんよ。そのうちに夜が明ける。荷役にやくが終る。おひるごろには、このノーマ号も平靖号も、サイゴン港を、おさらばする。ちようどだん取がうまくはこぶじやありませんか」と、船長ノルマンは、なかなか悪智恵わるじえをはたらかず。

「ふん、それでよかろう。では、さつそく、雑草園で、大盤ふるまいをはじめよう。お前、みなにそう伝えろ。船にのこっているやつも、できるだけ、上陸させてやるがいい」

「ええ」

「どうする、その大盤ふるまい始めの命令は。お前がもう一度上陸して、伝えることにするかね」

「いや、私はここにいます。そして事務長を上陸させましょう。」

「お前は上陸しない。なぜだ」

「雑草園には、あなたや私がいけない方がいいのですよ。いりや、またそのすじのやつなどにつかまって、こつちも、したくない返事をしなきゃならない。われわれがいけないで、みなに勝手に飲ませて、大いにわいわいさわがせておけば、官憲が調べようたつて、手のつけようがありませんよ」

「ふむ、なるほど。それは名案だ。じゃあ、事務長をよんで、お前から上陸命令をつたえろ」

「よろしゅうございます」

こうして、二人の巨魁きよかいは、ノーマ号に残っていることになつた。

一方、竹見は、サイゴンの町に急ぐと、医者をたずねてまわつた。

だが、なにしろ深夜のことではあるし、竹見の風体ふうていがよくないうえに言葉がうまく通じないという有様で、医者に来てもらう交渉は、どこでも、なかなかうまくいかなかつた。

(ちえつ、ぐずぐずしてりや、ハルクの奴は冷くなつてしまふ！)

と、竹見は、気が気でないが、相手の病院では、一向うごく気配けいがない。でも、最後の一軒で、ようやく蛇毒じやどくを消す塗薬ぬりぐすり

を小壇こびんに入れてもらうことができた。

竹見は、それで満足したわけではなかったが、ハルクを、あまり永く放りぱなしにしておくこともできないので、ようやくにして得た塗薬の小壇を握ると、再び、倉庫へ引きかえした。

そのころ雑草園には、荷役に従事した人夫や船員たちが押しかけ、思いがけない深夜の大盤ふるまいに、飲む食うおどる歌うの大きわぎの最中だった。

竹見は、そのさわぎをよそにハルクのねている倉庫の中にとびおりた。

「おい、ハルク。どうだ、容態は？」といったが、竹見は、けげんなかお！

「おや、ハルクがいない。あいつ、動けるような身体じゃないのに、どうしたんだろう？」

さんばし
栈橋

竹見は、大きな心痛のため、気が遠くなりそうだった。

「このまま放っておいては、たいへんだ。よし、どんなにしても、ハルクをさがしあてないじやいないぞ」

それから水夫竹見は、気が変になったようになって、重態の恩

人ハルクをさがしまわった。

倉庫裏のせまい路地を、彼は鼠のようになかけまわりもした。雑草園の饗宴のどよめきに気がついて、ふるまい酒にさわいでいる仲仕なかしや船員たちの間をかきわけて、ハルクのすがたをさがしどもめてもみた。路傍のねころがっている人をゆりうごかして、たずねてもみた。だが、一切の努力は無駄におわった。

水夫竹見は、がっかりしてしまった。

彼は、疲労の末、魂のぬけた人のようになって、棧橋のうえに佇たたずんだ。

「まさか、ハルクのやつ、この棧橋から、とびこんだんじやあるまいな」

そういつた彼は、もう動くのもいやになるほど、疲れ果てていた。彼はいつの間にか、棧橋のうえに、ごろりとたおれていた。涼しい夜風が快い眠りをさそつたのだ。

「おい、おい！」彼は、目がさめた。だれを呼んでいるのであると、目をみらいてみると、眩まぶしい懐中電灯が、彼のかおををたらしていた。彼はびっくりして、跳はねおきた。

「だ、誰だ！」

「なんだ、やつぱり竹じやねえか」

「そういうお前は……」

「誰でもねえや。おれだ。丸本だ！」

「えっ、丸本、なんだ、貴様だったのか。ちえっ、おどかさない」

丸本というのは、竹見と同じく平靖号乗組の水夫で、彼のいい相あいぼう棒の丸本秀三だった。

丸本は、彼のかたわらにすりよつて、

「こら、あんな雑草園のふるまい酒ぐらいに酔いたおれるなんて、だらしないぞ」

「冗談いうな。おれは酔つちやいない」

そこで竹見は、手短てみじかに、ハルクのことをはなして、丸本にもハルクを見かけなかつたかとたずねたが、丸本もやはり知らないところたえた。竹見は、いよいよ落胆らくたんした。

「おい、ハルクのことをしんぱいするのもいいが、ちと、虎隊長のことも考えてくれ。隊長は、雑草園へもいかなんだ。がっかり

しているらしいが、色にも出さないで、平船員の部屋で本をよんでいるよ。お前も何か、隊長にいつて、元気をつけてあげてくれ」
いわれて竹見は、気がついた。

「おお、そうか。虎船長は、いまは平靖号の船長ではなくなつて、さぞさびしいことだろう。おれは、ひよつとすると、ハルクが、平靖号へにげこんでやしないかとも思っていたところだから、これから一緒に平靖号へ帰ろうじゃないか」

「うん。帰るといふのなら、ちようどいま、ランチが一せき、あいているんだ。おれは、それにつて帰ろうと思つていたところだ。じゃあ、ちようどいい」

丸本は、竹見をうながして、棧橋のうえを、ランチの方へと歩

いていった。

二人が、ランチの索ひもをといっているとところへ、また一人、飛ぶように駈かけつけてきた者があつた。

「おーい、そのランチ、待て」

「だ、誰だ」

「おれだ」

飛びこんできたのは、これも平靖号乗組の一等運転士の坂谷だつた。

「おや。一等運転士。どうなすつたので」

「うん、雑草園でぐいぐいと酒をあおっていたんだが、妙に船が気になってなあ。それでぬけて来たんだ」

「えっ、そうですか。妙に船が気になるなんて、どうしたというわけです」

「どうもわからん。こんな妙な気持になったことは、初めてだ」
「ははああ、虎船長のことが、やっぱり心配になるんでしょう」
「いや、船長のことは心配しなくともいいんだが、船のことが、いやに気になってねえ。ともかくも、早くランチをやれ」

「へえ、合がってん点です。おい、竹見、考えこんでないで、手つだえよ」

「なんだ竹もいるのかね」

「へい、一等運転士。そういえば、わしもなんだか船のことが気がかりなので……」

「よせやい、竹。お前の心配しているのは、ハルクのことじゃないか。いやに調子を合せるない」

「うん、ところが、おれも急に今、船のことが気がかりになってきたんだ。どうもへんだねえ」

「ふん、何をいい出すか……」

そこでランチは、沖おきあ合いに信号灯の見える平靖号さして、

波をけ立てて進んでいった。

ちぞめ
血染の手紙

ランチは、平靖号の舷側げんそくについた。

「いやに静かだねえ」

「そうでしようとも。虎船長のほかに、だれもいないんですよ」

「まさかネ」

三人は、するすると縄なわ梯ぼしごのぼつて、甲板かんばんへ――。

「隊長！ 虎隊長！」

一等運転士は、気になるものと見え、虎隊長のところへ、とんでいった。

隊長は、平船員のベッドにもぐりこんで、暗い灯火の下で、本を読んでいたが、とつぜん帰ってきた三人の顔を見て、たいへん

よろこんだ。

「隊長、るす中なにかかわったことはありませんでしたかねえ」

と、一等運転手は、わざと何気なき体なげで、それを尋ねた。

「船のことかね、それとも、わしのことかね。どっちも大丈夫さ。心配するなよ」

と、破顔はがんたいし大笑したが、途中で、急に改まった調子になり、

「——そういえば、思い出した。さつき、丁度ちようどこの真上の甲板

あたりで、がたんと、大きな音がしたんだ。なにか、物をなげつけたような音だった。行ってみようと思ったが、生憎あいにくそ傍にはだ

れもないし、そのままにしておいた。あれは何の音だったか、だれか行って、見てくるがいい」

「はあ、この真上の上甲板あたりでしたか。その音のしたのは？」

一等運転士の坂谷と、水夫竹見とが、一緒にそこをとびだした。駈あがった二人は、甲板のうえを探しあぐりだした。

「あつ、これだ！」

一等運転士が叫んだ。

竹見が、かけつけてみると、一等運転士は、いっちよう挺ジャツクの水兵

ナイフをにぎっていた。

「おや、血が……」

竹見の心臓が、どきんと大きく波うつた。

「あつ、それはハルクの持っていた水兵ナイフだ！」

「えっ？」

ハルクの持っていた水兵ナイフが、なぜこんなところにあるの
だろうか。そのナイフこそは、ハルクが自ら右脚をきりおとした
ナイフだった。

「おい、なにか手紙みたいなものが、えにまいてあつたぞ」

「手紙？」

一等運転士の手には、手帳の一面をひき裂いたものが、にぎら
れていたが、それも血にそまつていた。

「なに、ほう、これは竹見、お前あての手紙だ」

「なんですつて、何と書いてあるんですか」

竹見には、英語がよくよめない。手紙は、英文だった。

「こういうんだ、親愛ナル竹ヨ。俺ハ復讐ヲスルンダ。コノ手紙

ヲ見タラ、才前ノ船ハスグニ 抜ばつびよう 錨よう シテ、港外へ出口。ハルク
“
どういふ意味だろうか、この手紙は”

「えつ、復讐！ 復讐は、わかるが、お前の船は、すぐにいかり
をあげて、港外にでろというのがわからない”

「ふむ、お前に喧嘩を売るんだったら、親愛なる竹よは、へんだ
ね”

「あつ、そうだ！”

と、竹見は、とつぜん弾はじかれたように、とびあがった。

「一等運転士、すぐに抜錨を命じてください。でないと、この船
は沈没しますぞ”

「なぜだ、とつぜん何をいう。なぜ、そんなことを”

「さあ、すぐ抜錨しないと危険です。一秒を争います。さあ、命令を……」

「おお、この事かなあ、さつきからの、わしのむなさわぎは！」
一等運転士は、やっと、自分のむなさわぎに関係をつけ、すぐさま船長のところへ、おどりこんだ。

「大至急、抜錨。総員、部署につけ！」
「な、なんだって！」

総員といっても、集まってきたのは、たった七人だった。七人で、抜錨ができるか。でも、大至急、それをやる命令が、一等運転士によつて発せられた。

虎船長は、かつがれて、船橋へ。すべて非常時のかまえだった。

汽缶きかんには、すぐさま石炭が放りこまれた。間もなく蒸気は、ぐんぐん威力をあげていった。

「避難演習かね、これは」

「だまって、はやくやれ！ 本物なんだぞ」

「気はたしかかね」

「お前、死にたくないのなら、黙って、命ぜられたとおりにやれ！」

水夫竹見は、ハルクを信じていた。だから、この大切な平靖号を、一秒も早く港外にうつさないで、取りかえしのつかぬことが起ることを信じていたのだ。その一大事が、どんな形で現われるか、そんなことを考えている暇ひまは、今の彼にはなかった。瀕死のハルクが、平靖号の甲板へ、血染めの水兵ナイフをなげこんでい

ったというそのことが、いかに驚異的であるか、それが分れば、まっしぐらにハルクの忠言に従うよりほかなかつたのであつた。

だいちんじ
大椿事

信仰のあつき一等運転士坂谷も、これまた、出来事の真相は、よくのみこめないが、靈感にもとづいて、死力をつくして出航を急いだ。

エンジンは、ようやくうごき出した。しかしいかり錨は、なかなかひ

き上げられなかった。これには、一等運転士はよわってしまったが、

「早くやるんだ。じゃあ、錨は、そのままにしておいて、船を出せ。全速力！ 全速力でやるんだ」

「全速といっても、錨が……」

「かまうことはない、錨びようさく索はフリーにしておいて、船を走らせるんだ」

船は、うごきだした。だから、錨索は、がらがらと船内からくり出していった。

「全速まで、早くあげろ。錨索を切つてしまえ」

そんな無茶な命令を、聞いたことがない。

「よし、おれがやろう！」

竹見は、大きなハンマーをかついで、甲板へとびだした。彼は、力一杯、走る錨索の上を、がーんと、どやしつけた。しかしそんなことで錨索は切れない。

そのうちに、とうとう錨索は、ぴーんと張ってしまった。船はエンジンをかけているが、錨のために、もはやすこしも前進しなくなつたのだ。

「だめです。一等運転士。錨が上らなきや、もうどうしてもうごきません」

「もつと石炭を放りこめ、蒸気が、まだ十分あがつていないじゃないか」

「だめです。そんなに早くは……………」

「石炭！ 送風機！ バルブ全開！ 錨を切つちまにや……………」

ガーン。ガーン。

竹見の傍に、丸本もやってきて、どっちも重いハンマーをふりかぶつて、錨索のうえに打ちおろす。錨索は、繰り返えされる衝撃のため、だんだん熱してきた。

ガーン。

がらがら、どぼーン。

「ああ、切れた！」

つよく錨索が引張られていたところへ、二人のハンマーが調子よく当たったので、錨索は、とうとう見事に切断して、水中へとび

こんでしまった。

「おお、切れた！ 全速」

平靖号は、弦を切つて放たれた矢のように、水面を滑りだした。

「おお」

虎隊長は、朱盆しゅぼんのようなかおをして、自ら舵器だきを握っている。

船は飛ぶ。

平靖号が走りだしてから、それは正二分しょうぶんののちのことであつた。天地も崩れるような大音響が、それに瞬間先んじて一大火光とともに、平靖号をおそつた。

「ああッ！」

「うむ、爆発だ！」

ひゅーと、はげしい風の音とともに、平靖号の真上を、なにものが走り過ぎた。つづいて、ばらばらがらと、さかんに物が横なぐりに、甲板へとんでくる。竹見と丸本の両水夫は、甲板にうつぶせになって生きた心地こころちはない。

爆音、また大爆音！

だが、平靖号は、さいわいにして、さしたる損傷もうけなかった。その大爆音は、はるかにサイゴン港内において頻発しているのであった。そのものすごい火の海を、なんといって形容したらいいのであろうか、また天地のくずれ落ちるような大爆音を、なんといって言い現わしたらいいのであろうか。爆発はまた新たなる爆発を生んで、いつ果つべしとも分らない。

火災だ！ サイゴンの街に火がうつつてもえだした。

「ああ、ハルクの復讐だ！ 彼奴は、きやつノーマ号のつんでいた火薬に火をつけたのだ！ それにちがいない！」

水夫竹見は、しばらくして甲板からかおをあげ、炎々たる港内の火をきつと見つめながら、うめくようにいった。

全くおそろしい出来事だった。これで、もう二分間おそければ、平靖号も、そば杖づえをくらつて、船体はばらばらに壊れてしまい、虎船長以下、竹見も丸本も、今ごろは屍しかばねになっていたかもしれない。

ノーマ号は、あと形なく飛び散った。船長ノルマンも、怪人ポ

ーニンも、ともに一まつの瓦斯^{ガス}体となつて消え失せた。それととも、かのごくひの大計画である海底要塞の建設事業も、一たん挫折してしまつたのだ。この怪人たちの陰謀のそばつえを食つたサイゴン港こそ、悲惨の極^{きわみ}であつた。沈没艦船三十九隻、焼失家屋五百八十余戸、死者三千人、負傷者は数しれず、硝子^{ガラス}の破片で眼がみえなくなつた者が、三百余人と伝えられる。

平靖号の船員も、相当死んだが、元氣な虎船長や竹見水夫がいる限り、これにこりず、改めてさらに壯途^{そうと}をつづけることである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第9巻 怪鳥艇」三一書房

1988（昭和63）年10月30日第1版第1刷発行

初出：「大日本青年」（「浪立つ極東航路」のタイトルで。）

※「丸本慈三」と「丸本秀三」の混在は、底本通りにしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2004年3月5日作成

2009年7月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火薬船

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>